

増田壽男先生退職記念座談会 人と学問：研 究生活の回顧

山本, 健兒 / 増田, 壽男 / YAMAMOTO, Kenji / INOUE,
Takashi / 小澤, 光利[司会] / 柿崎, 繁 / 菅井, 益郎 /
MASUDA, Toshio / 井上, 隆 / SUGAI, Masuro / KAKIZAKI,
Shigeru / OZAWA, Mitsutoshi [Moderator]

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

79

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

505

(終了ページ / End Page)

573

(発行年 / Year)

2011-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007733>

第二部

増田壽男先生退職記念座談会 「人と学問－研究生活の回顧」

日 時：2010年9月19日（日）

場 所：法政大学ポアソナードタワー19階
経済学部資料室

参加者：増田 壽男（法政大学総長、経済学部教授）
菅井 益郎（国学院大学経済学部教授）
井上 隆（青森大学経営学部教授）
柿崎 繁（明治大学商学部教授）
山本 健兒（九州大学経済学研究院教授）
司 会：小澤 光利（法政大学経済学部教授）

目 次

1. 参加者の自己紹介
2. 学生時代から法政大学着任まで
3. 学内状況と担当授業
4. 独占理論と現代資本主義論
5. 労働運動研究者集団
6. イギリス留学
7. 中国での体験
8. 再生産構造研究会とポスト冷戦研
9. 地域開発
10. まとめに

レジュメ：増田壽男「私の歩んできた道」

1. 学生時代

安保闘争, 学費値上げ反対闘争, 全共闘闘争

学部ゼミ……井村喜代子ゼミ, 大学院……伊東岱吉ゼミ

2. ゼミナール, 講義

97年から「大吟醸」を発行, 講義「経済政策論」2度ほど「日本経済論」

3. 研究

A 現代資本主義分析

「独占と蓄積に関する若干の論点」(「経済評論」(1976, 6月増刊号)

「現代帝国主義の分析視角」(高須賀義博編「独占資本主義論の展望」1978)

「戦後国独資の矛盾発現としてのスタグフレーション」(船橋尚道編「現代の経済構造と労使関係」1984)

「ポスト冷戦と「21世紀型危機」」(「経済志林」71巻4号2004)

B 労働運動研究者集団

「日本資本主義とスタグフレーション」(労働運動研究者集団編「スタグフレーション」1977)

「日本資本主義のしたたかさの構造と矛盾」(「賃金と社会保障」1982)

「外国人労働者の組織化」(「労働法律旬報」1996)

C イギリス留学

「サッチャリズムと炭鉱ストライキ」(「経済科学通信」1988)

「イギリス資本主義の危機とサッチャリズム」(「新保守主義の経済社会政策」1989)

D 再生産構造研究会, ポスト冷戦研究会

「現代経済と経済学」1997

「現代日本産業の構造と動態」2000

「長期不況と産業構造転換」2003

「日本産業の構造転換と企業」2005

E 地域開発

「循環型地域社会の形成をめざす企業間連携」(「経済志林」73巻1, 2号2005)

「エコタウン事業の理念と現実, 上, 下」(「経済志林」73巻3, 4号2006)

「なぜ地域開発は破綻したか」2006

1. 参加者の自己紹介

小澤（司会） 現在、法政大学総長でおられる増田壽男先生は、来年3月末をもって大学教員の定年を迎えられる予定です。本学の経済学部学会では定年退職される先生に対して、記念特集号のかたちで祝賀の意を表してきていますが、本日の座談会もその一環です。私は司会を務めさせていただく後輩の同僚である小澤です。どうぞよろしくお願いたします。

参加の皆さんの自己紹介からはじめ、その後は増田先生ご自身がお寄せになった「私の歩んできた道」というレジュメに沿ってお話を進めてまいりたいと思います。あらかじめ法政大学学術研究データベースに掲載されている先生の略歴をご覧ください。

増田壽男先生略歴

- 1964年 慶應義塾大学経済学部 卒業
- 1970年 慶應義塾大学経済学研究科博士 単位取得満期退学
- 1970/04-1971/03 法政大学経済学部特別助手
- 1971/04-1972/03 法政大学経済学部専任講師
- 1972/04-1979/03 法政大学経済学部助教授
- 1979/04- 法政大学経済学部教授
- 1984/04-1986/03 イギリス歴史研究所（ロンドン）留学
- 1993/04-1995/03 法政大学経済学部長
- 1993/04-1995/03 法政大学評議員
- 2000/04-2002/03 法政大学比較経済研究所長
- 2008/04- 法政大学総長・理事長就任

小澤 それでは自己紹介を菅井先生からお願いします。

菅井 国学院大学経済学部で日本経済史を教えている菅井と申します。私の専門は公害の歴史ということで、実際には大学の外ではずっと反

原子力の運動をやってきています。

増田さんとは労働運動研究者集団で、私は市民運動、あるいは住民運動と労働運動の接点というかたちでかかわっていたのですが、増田さんは日本資本主義分析という視点から集団の活動にかかわっていきまして、1976年からですから、かれこれ34年のつきあいとなります。私にとっては本当に兄貴のような存在です。きょうはよろしく願いいたします。

柿崎 明治大学商学部の柿崎と申します。商学部で、私は理論経済学、いわゆる原論を担当させていただいています。研究テーマは日本資本主義ということになるのですが、アメリカ、日本の比較検討を通じて、最終的には日本経済問題について分析したいと考えています。

増田先生との関係ですが、1975年に法政大学の大学院社会科学科経済学専攻に入学して以来、長いおつきあいをさせていただいています。直接的には、私は古川・南先生に師事しまして、その授業にはいろいろな方がみえていて、研究会には増田先生もいらして、非常にストレートな



参加者：左から増田壽男・山本健児・井上隆・柿崎繁・菅井益郎・小澤光利の各氏

批判も含めていろいろご指導いただいたという関係が院生時代にはありません。

そのあとは再生産構造研究会という古川・南先生主宰の研究会を継続してやっていて、それが途中でいろいろ経緯があってポスト冷戦研究会ということで、増田先生が代表で、日本資本主義分析で外に成果を出そうと何人かで集まって継続的にやったグループがあります。再生産構造研究会、ポスト冷戦研究会ということで著書も何冊か出ていますが、もっぱらそのグループを中心にして一緒に出させていただいたという関係です。

人となり等はそのうちに出ると思いますが、いろいろな意味で率直にご批判なりサポートしていただいて、自分が成長するうえにあたって大にご指導いただいたということで感謝しています。きょうは先生の全体像が明らかになるのに少しでもお手伝いできればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

井 上 青森大学の経営学部から参りました井上と申します。増田先生は1971年から経済学部の専任講師になられているのですが、私は1972年度から学部で、3年、4年とゼミに入って指導を受けました。それから、先生はそのころ必修科目の経済政策論を担当していらしたのですが、それも受講しています。

そのあと大学院の修士課程は早稲田に移って、それが終わってから高等学校で3年ほど教壇に立っていたので5年ぐらい空いたのですが、大学院の博士後期課程に進むときに法政大学大学院に戻って、また先生の指導を79年度から受けるようになって、その後ずっと指導をいただけてきました。

増田先生は84年度、85年度とイギリスに2年間留学をなさっていたのですが、その間は先生が持っていらっしゃる科目のうちのいくつかを代講してまして、専門ゼミや外書講読などを担当させていただいたという関係です。

二十数年前に青森大学に移ったのですが、その後は音信不通になりましたね（笑）。青森大学に移ってまもなく組合づくりを始めまして、何度か執

行委員長をやったりしていたのですが、その後は学園民主化ばかりやっています、事実上、研究が途絶えたこともあって、先生とは音信不通になったということです。

したがって、今回は若いときというか、二十数年前から前のお話しかできないのですが、先生の人となりや研究について私が言えることがあればと思って参った次第です。なお、青森大学では日本経済論と地域経済論を担当しているのですが、その2科目とも増田先生がいろいろ私に話して下さったことが土台になっているというか、きっかけになっていました、それはまた後ほどお話し申し上げたいと思います。

山本 九州大学経済学研究院の山本と申します。私が増田さんとはじめてお会いしたのは1982年3月、何日だったかは忘れましたが、要するに4月1日に法政大学に赴任する直前に、当時、移転を控えていた経済学部教授会がこぞって多摩のキャンパスを見学に行ったついでに、八王子のとある結婚式場で懇親会兼、歓送迎会をやって下さった。たぶん、その場ではじめてお会いしたということになります。

ただし、その時点で私は増田さんを増田さんとはまったく認識していません。私はそのときは入ってきて歓迎される立場で、経済学部の教員は40人近くいましたか、誰が誰であるかわからない状態で入ったのでわかりませんでした。年月の経つうちに酒の席で、あるいはスキー場でいろいろと指導を受けました。

ですから、研究上のおつきあいはほとんどなかったのですが、それでも増田先生のメモの地域開発というところは私がいちばん関係しています。というのも、私は法政大学では経済地理という科目を担当していましたので。

2006年4月に法政大学から九州大学に移って、そこでは産業配置という科目を担当していますが、産業配置というのは産業立地、こういった場所に産業が立地するのが合理的であるのか。あるいは、合理的でないとしても、産業の立地が、その地域に対してどういう影響をもたらしていくのか。

そういったことを法政時代の経済地理の授業でやっていましたので、九州大学の産業配置というのは経済地理の一部分と考えて授業をやっていました。

増田さんとの関係では、編著で出された『なぜ巨大開発は破綻したか』のための苫小牧調査に「お前も来い」と言われて、私は知らないところへ行くのが好きですので、「では、喜んで」とついていって一緒に勉強させていただきました。

それからその上の二つの論文は、増田さんも含めて私が科研費の資金をうまく取得できましたので、増田さんともう一人、法政の同僚である環境経済論の西澤さんと3人で北海道と九州を調査したときの成果であります。

そのほか増田さんとの関係でいえば、法政大学に勤め始めた1982年の夏に、いろいろなところに行くのは面白いから、今年は九州のほうに行ってみようよと増田さんが声をかけてくれて、その当時はシリコンアイランドということで華々しくなり始めた熊本の九州NECであるとか、しかしそれだけではなくて新日鉄大分であるとか、延岡の旭化成といったところを二人で漫遊して歩きました。

そういったあたりで深い研究というつきあいはないので、どちらかといえば遊び、および酒の席でのつきあいのほうがはるかに長いのですが、そういったかたちで一緒に勉強させていただくこともありまして、酒の席でいろいろ教えていただくこともありました。そういう関係です。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 学生時代から法政大学着任まで

小澤 参加の皆さんの自己紹介ありがとうございました。このあとの話の進め方は、先生ご自身のお寄せになったレジュメ「私の歩んできた道」にしたがってまいりたいと思いますが、最初にまず学生時代に立ち戻って、先生からお話しいただければと思います。

増田 私が慶應大学に入ったのはちょうど1960年で、1年浪人して入



増田壽男氏

った途端、安保闘争のど真ん中でして、入学したのか安保のデモに行ったのかわからないようなかたちで1年間はあっという間に過ぎました。

そんななかで2年生になったら今度は自治会の委員長をやれという話になって、慶應は日吉と三田に分かれています。

日吉の自治会の委員長は2年生がなるというかたちになっていましたので、日吉の委員長なんかになっちゃったものですから、安保のあとの日韓闘争などの運動をずっとやっていました。

慶應の大学院を終わったのが70年で、70年から法政に来たんですけども、70年までほぼなんやかんやと、学生運動というか自治会運動みたいなものにかかわってきました。

大学院も、入って少し勉強しようかなと思ったときに、学費値上げの反対闘争がまたすごい勢いで盛り上がりました(笑)。そうしたら栗本君という活発な変わり者の学生が、どうもへんな妥協をしそうだというので、それを妥協させないような運動をどうやるかとか、大学院をそろそろ終わるぐらいのところでもまたそんなことをやって、そして法政を受ける頃になって全共闘の大運動が始まって大学封鎖という話になってきてしまいました。

一緒に封鎖に入ってしまうと、これは就職どころじゃないな、逃げようかなと思ったのですが、カッコよく逃げるのはなかなか難しく、ウジウジしているあいだに、法政を受けながら学生と一緒に閉じこもって大学の中にいるみたいな、へんなかたちをやっていました。

そんなことだったのですが、一応学部のゼミは、もう退官されていますが、井村喜代子さんがはじめてゼミを持つのにゼミ生がいないというので、「それじゃあ、行ってあげようか」という感じでゼミに入りました(笑)。

大学院は、伊東岱吉さんという中小企業論の大家のゼミに入りました。伊東先生はかなりいろいろな調査や実証を中心になさっている方で、お酒も好きですが、人物もすごくいい人でした。小泉信三ゼミで小泉さんの話なんかもいろいろお聞きして、私が「天皇の御用係をやっているような人はあんまり」と言う、「君、人物をちゃんと見てから評価しなさい」と怒られたりしたような経験がございます。

1970年に法政大学に特別助手として入るのですが、これがまた紛争がいちばん激しい時期でして、法政の経済学部はたぶん20人近くが受けたと思うんですね。経済学部はその当時は科目が指定されていなくて、三つ四つ自分で好きな科目を選べというので、私は経済原論と恐慌論と、そしてそれだけだとちょっとまずいかなと思って、経済政策論とか三つぐらいを挙げて受験したと思います。

うまい具合に受かったのですが、同期に山本さんの先輩である矢田君。いま北九州市立大学の学長をやっているらしいんですが、彼と一緒に1970年に法政に入って、特別助手というのは1年間何もなくていいんですが、ただ学校が閉鎖されていて、4月になっても何も通知が来ないんですよ。鈴木徹三さんが学部長で、「君、受かったよ」と電話1本をもらっただけで、あとは何も連絡がないんです。

それでそろそろ4月になっちゃうし、給料は出るのか、健康保険なんかはどうなっているのかということで矢田君に電話したら、矢田君も不安で、二人で事務室を探そうとしたら、教えてくれないんですね。隠れて、どこか裏のほうに……、要するに、学生だと思われている（笑）。

「事務室は？」と言ったら、「何の用ですか」というから、「4月から教員に」。そんな格好で教員のはずはないでしょうとか何とかかんとか言われて、やっと事務を探し当てて、もうとっくに定年になった大屋さんという人が経済の事務室の責任者で、彼が「君と矢田君の二人は、ちゃんと特別助手で採用されていますから」と。承認書みたいなものはないんですかと聞いたら、そんなものはないと言われて、給料が振り込まれたらちゃんと

入ったことになるからって（笑）、そんな感じで過ごしました。

ですから、井上君が72年に入ってきた頃というのは、ほかの大学はそろそろ静かになってきた頃だと思うんですが、法政はそこからがかなり激しくて、しかもゲバとリンチの大騒動になって、何しろ学校に授業に来ると、血だらけの学生がそこら中にいるみたいな雰囲気が出た、5年続きましたよね。だから、そういう殺伐たる雰囲気の中で授業をするなんていうことを経験しました。

71年からゼミナールを持っていたと思うんですが、最初のころはたぶん井上君と10歳も年が違わないぐらいだと思うんです。だから、同僚みたいな感じでゼミ生とつきあうという感じでやっていて、最初の頃のゼミは何をやっていたんだか、よく覚えていないので、井上君のほうから話してもらったほうがいいのかも说不定（笑）。私はもうほとんど、この頃、何をやったとかの記憶が……。

今でも毎年OB会を我が家でやっていて、そこに井上君たちの代の人はずっと仲良しで、いつも5人ぐらい「もう定年だ」とか言いながら来られます。若い学生をつかまえては文句ばかり言っているおじさんがいっぱいいるんですが、そんな感じでつきあっています。

ゼミナール誌を企画してくれた学生達がいる、97年から「大吟醸」というを出しています。これも今年度で終わるといっているので、97年からということ、もう終わり頃になって出したという感じですが、一応続いて、12、13号になっていると思います。

私の学生時代からの状況はそんなことでございます。

3. 学内状況と担当授業

柿崎 先生は、学生部長か何かをされておりましたよね。

増田 学生部長ではなくて、副主任。副主任はけっこう早いうちにやったんだね。70年代の後半かな、もう血だらけの紛争は終わって、中核が

ある程度落ちついてきた頃で、中核と交渉するというのと、まだその頃は中村哲さんが総長で、法政は総長団交を延々とやっていたから、総長団交の裏工作みたいなことばかりやらされていた（笑）。

中村さんはひどいんですよ。もうここで終わると彼らと約束して待機時間になっているのに、中村さんはそれから突然しゃべり出すんですよ。元気だから今やめるのはけしからんとか言われちゃって、いつになっても終わらないという感じの団交が結構ありましたね。

菅井 それは有名な話ですね。中村さんのタフさというのは（笑）。

柿崎 だから、副主任を辞められて、我々がまだドクターに入ったぐらいで学生にとっつかまって団交で。

増田 お立ち台というのは、経済の若い先生じゃなくて、中高年の先生はだいたいピロティの正面ぐらいで……。

柿崎 やられていますよね。

増田 上半身はきれいだけど、下半身はそれこそ傷だらけなんていう先生が結構いらっしゃいました。

井上君、ゼミのあたりで何か思い出というのは？ 尾瀬あたりのゼミのとき、何かひどかったよね（笑）。

井上 70年代については、たぶん僕がいちばん詳しいかもしれないです。

小澤 ゼミの1期生でしたか？

井上 2期生です。先生の研究についてはまた後でお話し申し上げますが、教師としての面ではたいへん人気がありましたね。ご本人を目の前にして言うのも言いにくいですけども。

僕の学生時代に法政大学の経済学部は何十人先生がいらしたかわからないですが、若手の先生方は授業では学生に人気がなかったんですよ。僕は今でも覚えているんですが、ある先生は90分授業が、毎回30分ぐらいで終わっちゃうんです（笑）。ここまでしか準備していませんので、きょうはこれでおしまいって。次の週も同じことを繰り返している先生もいました。

若手の先生ですね。

それからもう一人、お名前は申し上げませんが、69年館のいちばん大きい教室があるんですが、毎回黒板に表を書くんですよ。黒板を下ろして、また表を書く。それを解説するわけです。それを毎週やるわけです。そのうち学生は来なくなるわけです。誰か交代で来て、来たやつに写させてもらえばいいわけですから。そういう若手の先生が多いなかで、増田先生は90分、目いっぱい熱心に話されて、話の内容も面白かったですから、若手の先生の中では授業は人気があったという印象です。

ただ、みんなが考えていた授業の中身と違うことは違うんです（笑）。というのは、経済政策論という科目を必修科目で持っていて、学生の3分の1ぐらいは真面目なんですね。3分の1ぐらいはどうでもよくて、あとの3分の1は来たり来なかったりです。その真面目な3分の1はどのような学生かというと、国家公務員Ⅱ種とか、国税専門官とか労働基準監督官とか地方公務員の上級職とか、それから上場企業を受けるような人たちで、その学生たちは経済政策論という科目で、受験に間に合いそうなオーソドックスな中身を期待しているわけです。

ところが、先生の話は1年間ずっと独占論をやるわけですから、どうも期待している中身と違うとみんな薄々感じるわけです（笑）。でも、面白いですから毎回みんな来て、熱心な3分の1は一生懸命聞くのですが、どうもこれでは受験に役立たないとみんな思っているわけ。そういう意味ではがっかりして聞いていたんですが、面白くて、僕もずっと授業を聞いていて面白かったということ。

それから当時、法政大学の経済学部の学生に人気があった先生方というのは数人いらして、みんな年代的に言えば中堅で、近代価格理論の伊東光晴先生、恐慌論の南克己先生、世界経済論の川上忠雄先生、それから特講でおいでになっていたのが廣松渉先生と太田薫先生。いや、太田薫さんと呼ぶべきですかね。戦後日本の労働運動というテーマで2年連続で特講をやっていたらして、これは法学部や社会学部にも開講科目でしたから、教室

は鈴なりで、毎回早く行かないと入れないぐらいでした。1年間入れないんですね。

伊東光晴先生はテープレコーダーを持ち込んで聞く学生もいたりしましたが、あとはおおむね不評で（笑）、高齢の先生方の授業はほとんど不評でしたね。本を読んだほうがわかるぐらいで、ある先生は立派な本を書いていらして、僕は学生時代に岩波全書を買って読んで、本はわかるのですが、授業は何をおっしゃっているのか全然わからない。

そんなわけで若手の先生方は10人ぐらいいらしたのですが、その中では増田先生の授業は毎回、欠席する学生が少ないぐらい人気がありました。それからゼミでも先生の話は面白くて人気があったんですが、ゼミの授業でというよりも、終わったあと、喫茶店に行くわけです（笑）。そして、喫茶店で2時間も3時間も先生が一人で話されるわけですね。何か言うと、「それは違う」と言ってまた話されるんです。それは面白かったんですが、いささか大ざっぱな話が多かったという印象ですね（笑）。

ただ、僕と同じ世代の連中は増田先生と8歳、9歳ぐらいの年齢差ですから、少し年上のお兄さんみたいな感じでつきあっている連中が多くて、その人たちは卒業後もずっと先生のお宅に正月に遊びに行くという感じで、兄貴分みたいな感じだったという印象です。

もう一つだけ、僕は学部の講義を聞いていてもゼミでも、ずいぶんと大ざっぱな先生だと思っていたのですが、僕は2年ぐらいから原論、『資本論』を自分で読んでいて、あるときわからないところがあって増田先生のところに、「ここがわからん」と持っていったんです。具体的には、純生産物というのがよくわからんと。ある時には $v+m$ のことを言っているようにも読めるし、ある時には m だけを言っているようにも読めるし、わからんといって持っていったら、増田先生が見てくださって、「おれにもわからん」とおっしゃったんです。

それで「わかる人のところに行こうぜ」と、僕を日高晋先生のところに連れて行ってくださったんです。日高先生がおっしゃるには、必ず一語が

一義だということはないから、前後関係でそう読めるときはそうだし、別に読めるときはそれでいいんですというようなことをおっしゃって、答えは簡単だったんですが（笑）、僕がそのときにたいへん感動したのは、「わからないから一緒に行こう」と連れて行って、ごまかしもされず、自分の専門外だから知らんともおっしゃらない。

僕を58年館の向かい側にあった教授室みたいなところに連れて行ってくださったのがたいへん印象的で、そのときに僕は感動したんですね。そんな思い出がたくさんあるのですが、それはまたあとでお話することにします。

菅井 三つの科目で受けたということですが、結局どれで入ったんですか。

増田 僕は恐慌論がいいと言ったら、鈴木徹三さんが、君は経済政策論に決めたとおっしゃった（笑）。だから、「そんな、勝手に」と言ったんだけど、何しろ講義を持って、大学に就職できたんだからいいかという感じで、科目については何も文句を言わなかった。矢田君みたいにちゃんと経済地理って決まっている人は、「ほかは僕はできません」と言えば、もうそれでよかったんだけど、「君は何でもいいんだろう」と言われてしまって（笑）。

だから、そんなのでずっと経済政策論に結局なっちゃったんですよ。

山本 恐慌論は川上さんがずっとやっていたしね。そして原論は立派な先生が何人もいたし、したがって残りで経済政策という話になったんじゃないですか。

小澤 その頃のゼミのテキストは、何を使われていたんですか。

井上 バラン＝スウィージーの『独占資本』を使ったこともありましたし、いろいろでしたね。

小澤 その当時、論文でお書きになっていますよね。

井上 ただ、先生自身がお書きになった論文をゼミのテキストにしたことはなかったです。

4. 独占理論と現代資本主義論

小澤 それでは研究に移ります。今の話にも出ましたが、法政大学に入られたのは、大学院時代に研究されていた独占理論の論文で入られたわけですね。

増田 きょう小澤君が補遺で書いてくれたなかで、私がドクターコースで書いたのは「独占価格の運動に関する一考察」で、これを法政に出して通ったんですよ。

小澤 これと「独占分析への一視覚―バラン＝スウィジー共著『独占資本』によせて」。「独占価格の運動に関する一考察」が処女作ですか。

増田 いや、これじゃないね。これより前に『三田経済研究』に何か書いたものがある。

小澤 それは大学院の雑誌ですね。

増田 うん、それがいちばん最初かもしれない。

小澤 これは全部網羅したものではなくて、だいぶ欠けていますが。

増田 法政に入った最初の頃は、そんなに幅広くやるということは一切できませんから、ほとんど独占理論をね。独占理論で経済政策論を1年間やるわけにもいかないなと思いつつも、知っているところである程度は話さなければいけない。10回ぐらいは帝国主義とか独占という話で授業をやって、経済政策のトータルの話って、重商主義の話なんかをやっていると、一回話すともう終わっちゃうんだよね、ネタがないから(笑)。

だから、毎年勉強しながら1時間分増やしていくみたいな話で、「独占と蓄積に関する若干の論点」と、高須賀義博さん編の『独占資本主義論の展望』に書いたのが、この頃の比較的頑張ったもので、「独占と蓄積に関する若干の論点」というのは北原勇さんと古川哲さんの批判の論文なんです。師匠を批判せずして人間にあらずみみたいなことを言って、批判が的を射ていたかどうかは若干疑問なんですけど、ただ彼らに従わなかったということ

ろが少しはいいかなというぐらいで。

高須賀さん編の「現代帝国主義の分析視角」というのはサーベイを半分ぐらい含んだもので、これは世界経済論的な川上さんなど宇野理論まで全部含んで、けっこう広い視角から書いたものです。

そのあとはもう国独資の話を生懸命やり出して、さまざまな論文を書いたんですけども、船橋尚道さん編で書いたのは、船橋さんが労働で、私と小林謙一さんが経済から入って労働関係の本を作るといったのに、「今僕は労働にあまり興味が無いから、好きなものを書いていいですか」ってこれを書いたら、船橋さんが「お前、こんなの本に載せられないだろう」というので表題を変えていただきまして、『現代の経済構造と労使関係』にしてくれて、この論文を……。

これ、100枚ぐらい書いてしまったんですね。だから、本の体裁としても船橋さんには申し訳なかったのですが、そんなのを書いたぐらいですね。

菅井 これをもとに、あとで労働運動研究者集団で報告された。同じ頃ですね。

増田 そうそう。だから、一貫して私のテーマといえば独占論と現代資本主義論というので、途中でかなり日本とか労働とか多種多様なほうにいろいろ移ってしまったのですが、2004年の「ポスト冷戦と『21世紀型危機』」というのは久しぶりにもう一回書いたもので、あと経済理論学会にも同じような感じで書きました。

現代資本主義論というのを著作にしようと思いつつも、あちこちテーマが散っていて、ちっとも本にならなくて、山本さんなどから比べるとさささとまとめるという能力が不足しているなど自覚しているんですけども。

小澤 最初というか、70年代の前半は独占理論の研究が中心になりますか。

増田 そうですね。ほとんど。

小澤 70年代後半に入ると、当時注目され始めたスタグフレーションの問題に移られているという感じがします。

増田 大内批判なんかから、スタグフレーションを始めたんだよね。だけど、スタグフレーションってあれだけ騒いだにもかかわらず、物価が収まってしまうと、スタグフレーションなんていうのはいったい何だったんだ（笑）。現代、スタグフレーション、インフレーションがどこかにいってしまったみたいな話になっていますから、その辺で経済学というのも現実の後追いのようなところもあるのかなという感じもします。

柿崎 それでも、例の停滞基調というか、そのこのベースは一貫して変わらないと受け止めます。これは具体的な日本の現状分析とかサッチャリズムなどの評価の軸になっていると思います。そういう意味では、この時代の独占分析や世界システムの問題というのがずっと生きているんだろうなどは感じています。

小澤 私の読んだ論文で記憶に残っているのは「自動回復力の喪失について」で、これは『三田学会雑誌』のものですね。これは独占段階における停滞性、腐朽性というものを強調したものでしたが、それは一貫されている。つまり、現実分析の際にも理論的な基準になっているというんですかね。

それらを、先生ご自身は「A 現代資本主義分析」という項目で取り扱っておられるわけです。

5. 労働運動研究者集団

増田 節操がないよね。テーマが次から次へと変わる（笑）。川上さんがいけないんだよね。

小澤 何ですか、それは（笑）。

増田 法政に入ったのが70年でしょう。75年ごろから日本の労働運動を何とかしなければいけないということで、戸塚さんと兵藤さんと川上さんが3人でそういう研究会をつくろうという話になって、「お前も来い」と言われて、発足の準備をしている段階ぐらいからだんだん入って行って、

発会ときは責任者みたいなものに……。

そんな30代ぐらいは入っていないじゃないですか、大家がみんな入っているんだからと言ったら、「いいんだ」と。私と中国研究者の矢吹さんがちょうど若い二人ぐらいで、あとはみんなもう中ロートル、大家ばかりで、労働運動研究者集団というのは76年10月辺りに作り上げたんですね。

この研究会は私にとっても非常に大きい影響を与えて、これは単なる研究団体ではないと命名した集団で、実践的寄与。だから、テーマが「階級的労働運動への模索」なんですよ。70年代の後半で「階級的労働運動」なんていう言葉を、そろそろ死語に近いようなときに復活させる。「革命は近し」みたいな意気込みで労働運動を再生しようというので、いろいろな現場の運動に積極的に関与しました。

その中でいちばん長くつきあって、現在もおつきあいが消えていないのが全金南大阪、田中機械の中小企業の自主生産闘争。戸塚さんはそのころずっとそういう研究をしていたんですが、その田中機械の調査は泊まり込みの泊数からいえばかなりになります。宿泊所は争議の会社の中だから、ただでしたが、4～5年、行くと1週間ぐらい泊り込んでいろいろやっていました。

この運動は非常に面白くて、研究者集団編の1冊で佐野稔さんという、その当時の和歌山大学の先生がまとめたものがありますが、要するに田中機械という中心的な、どちらかという中堅企業の製糖機械メーカーなんです。砂糖の機械の製造メーカー。製糖機としては大正時代ぐらいにできた老舗のメーカーですが、大きいのはそれと大阪垂鉛で、それが300～500人ぐらいの規模の企業で、あとはみんな中小企業、港区を中心にした10社ぐらいで港合同という一種の合同労組を作って運動をしていました。

その中の田中機械が倒産して自主生産に入っているというかたちの調査で、結局は田中機械は再生はしなかったんですが、最後まで彼らは居残って、現在もそこに居残って、温泉をやったりしています。

そういう調査をしたり、浦賀造船に行って調査をしたり、国労もあちこ

ちやったり、菅井さんのほうから少し話してください。

菅井 76年のはじめぐらいですね。たぶんその呼びかけが行われて、これがまたすごくて、これを引っ張り出したんだけど。

増田 檄文だよな。

菅井 本当に檄文ですよ（笑）。労働運動研究者集団ですが、「名称、この会は職場から階級的な労働運動を！研究者グループと称する」（笑）。これではちょっとあれだというので、日本評論社から出したシリーズの7冊、結局は第1期だけ出たんですけども、そこでは……。

増田 ちょっとトーンをね。

菅井 職場から階級闘争をというのが、階級的労働運動の模索となりましたが、いずれにしても高度成長が終わって構造的な不況がずっと続かなかで、それから74年の国鉄のストもありまして、それが最後で、あとは労働運動がずっと沈滞化していく状況のなかで、やはり職場闘争が中心だと。

そういうことで東大の労働グループと、かつての活動家仲間といいたしょうか（笑）、そういう人たちが発起人になって労働運動研究者集団を作ることになったらしいです。私は76年4月から東大の助手になって、私は公害問題ですが、かたちの上では労働グループにいたものですから、これは有無を言わず巻き込まれたわけです。

結果的には、増田さんも先ほどおっしゃっていたように、私もずいぶんここで学んだことが多かったと思います。増田さんは今謙遜しておっしゃっていましたが、現代の危機の経済構造を分析するのが重要であると。そして労働者の主体性をどうつくっていくかとか、運動論とか、それからその現地調査。

増田さんは現地調査のことを話されましたが、現代資本主義、当時の日本資本主義分析ということ、たぶん具体的に担うという役目だったと思います。いわば東大の労働グループがあ頃は、30年前ですから、50代ですよね。50歳前後で、そして増田さんと粕谷さん。粕谷さんはもう少し下

になりますかね。

増田 同じ。

菅井 それから矢吹さんとか、その世代が何人かいて、私と井上雅雄君と平井陽一君と、その3人が一番下で、使い走りをしました。

とにかくみんな、ものすごく精力的なんですね。そして研究もやるし活動の現場にも行くしということで、私たちから見ると戸塚先生とか大先生クラスで、私どもは「先生」と言わないで、「戸塚さん」とか言っていました。

それから集団は違った人たちを集めるというので、例えば喜安朗さんとか、川上忠雄さんもそうですし、そういう労働プロパーでない人間を集めることによって、むしろ労働運動の活性化のきっかけをつかみ出そうというグループでしたので、非常に自由な討論が行われました。

そしてその議論を持って、そのまま現場にも入っていく。現場に入ったときお互いに共鳴するような部分がありまして、かなり運動側に寄った研究者集団でした。もちろん研究もして、私はあまり研究しないでもっぱら現場を飛び歩いていましたが、そういうことで現場から問題をくみ取っては、それを研究する。研究したものを労働の現場に返すということで理念としてはよかったのですが、本当に返したものが役立ったかどうかという検証は誰もしていません（笑）。でも、何かあったのではないかと思いますね。

増田 この集団の中で、労働組合の特に大単産の人はあまりつきあわなかったけれども、中小の人とはその後もずっとつきあいが現在まで続いていますので、いろいろな情報を得るという意味でも非常に役に立つというのがありますね。

それから菅井さんがおっしゃいましたが、歴史の人が喜安さんを中心にいっぱい入ってくださっていたので、ドイツのレーテとか、喜安さんはフランス革命後のパリコミューンの分析が中心の人でしたから、それが日本の歴史主義と違って、一人ずつの個人がどうかかわり方をしたかとい

うことを丹念に、今でいうと、どちらかというと構造主義に近いのかね。そういう視角が非常にあって、何で労働者は立ち上がったかを歴史的に説明するというのを一生懸命やっていたらっしゃいました。

だから、調査をやるのでも手法が経済学畑の人と全然違うんですね。だから、何しろ本人がどうしてこの運動をやるようになったかということ、一生懸命丹念に調べるみたいなことをよくやっていたらっしゃったので、そういう意味でも非常に新鮮でしたよね。

菅井 そうですね。運動のあり方、方針、組織の力とか、そういうところまで踏み込んだ議論をかなりやりましたからね。私は南大阪のほうは一回しか行ってないんですが、あの迫力は学んだものがありますね。特に田中機械の大和田委員長なんていうのはものすごい人でしたから、普通の研究者はたぶんああいう人と議論はしないと思うんですけども、本当に向こうもよくつきあってくれた。

南大阪の争議には暴力団がからんでいて、そういう意味では緊張した議論がいっぱい聞けました。

向こうも、学者が調査に来るというのは頼りにしていたところがありましたね。

増田 裁判の調書もけっこう作りましたし、亡くなりましたが、学習院の宮島さんなんかが弁護の証人に立ったりしましたから、そういう意味でいうと研究者というよりも、労働者側に立った研究者をちゃんとしてようと、カッコいいことを少しはやろうという努力はしたみたいですね。成果があがったかどうかは、なかなかわかりませんが。

山本 その集団はいつまで続いたのですか。

増田 それ解散がはっきりしなくて、最後は事務局の責任者を私がずっとやっていたのですが、90年代に入ってかなりしょぼく出出して、実質上、92～93年で研究会は終わりになってしまった。

菅井 最後はだんだん離れていく人が出てきてというか、研究会に出てこない、あるいは調査も行かなくなってきた、戸塚さんが中心になりま

して、91年ぐらいから増田さんを我々の仲間の代表として、数人でこれからどういう集団をやっていくかと。それから地方の方は、年取ってくるとだんだん出て来にくくなってしまって、そういう人たちに対してどうやろうとか、組織をどう作って再生するかという議論を2、3年したと思います。

増田 解散宣言もしていないんだよね。

菅井 解散宣言は一応しました。

増田 だけど私、まだお金持ってるんだよ。余ってるんだよ（笑）。

菅井 そのあと戸塚さんが埼玉大を辞められた後で、「私は私塾的なものをやりたい。一緒に来ないか」といって、増田さんを筆頭にして我々残った人間が何人か行ったんです。私は一番下っ端で運営委員をやっていたんですが、国際労働研究センターでも増田さんが運営委員をやられて、そこに一応引き継ぐ格好をとっています。

会員の方は、そのときにだいたい引き継がれていると思います。だから、例えば法政では五味さんなんかもときどき来られましたし、粕谷さんは常連で、法政の人たちとわりと近かったと思います。東大、法政が中心になってやっていた。

それで戸塚さんが、95年に国際労働研究センターの設立をよびかける。つまり89年、90年、91年と、あのころ冷戦構造が崩壊し、それともう一つは労働運動が大きくなって、連合は89年にできます。ですから我々が目指した方向ではなくて、階級的労働運動と逆の方向に現実はどうどん動いていったわけで、そういうなかで集団のあり方も変えなければいけないというか、見直していく。そしてその頃から、もともと中小企業の労働運動が対象だったわけですが、そのいい活動家がまた集まってくるという構造の中で90年代に入りましたね。

そして戸塚さんがお辞めになるときに、これからは日本も海外投資している、だから海外の調査をしなければいけないということで、それが後に増田さんがお書きになる移民労働者の問題にもつながるのですが、たしか

そのプロジェクトの一つに入ったんですね。それで国際労働研究センターが立ち上がって、何となく集団のほうは……。

増 田 集団のほうはどこかに行っちゃってね。

菅 井 国際労働研究センターは2007年ぐらいまで続きますかね。そのころで一応……。

増 田 解散宣言を何回もやったんだよね。

菅 井 そうです。

増 田 そのたびに反対が出て。

菅 井 いや、もう、そういうときは増田さんが頼りなんです。我々だけだと対応できませんし。ですから、最終的に解散したあと、また一橋大のほうに今度はフェアレイバー教育研究センターを立ち上げて、一方国際労働研究センターの新たな活動的な部分というか、海外の活動家との交流の部分はLabor Nowという方向にいて二つに移していった。いずれにしても増田さんはそこへも何となく、今はもう長老になりましたので相談役という格好になっていますが、国際労働研究センターまでは増田さんはかなり中心的な運営委員だったと思います。

小 澤 1996年にお書きになった「外国人労働者の組織化」というのは、その中から生まれたのですか。

増 田 これはLabor Notesの人達が著書を出しまして、これはどうやって労働運動をやるかというノウハウの本で、それを訳そうというので、10人ぐらいで各章を分担して訳したんですね。でも、訳しても本屋が出版してくれないという話になって、校正で直せばいいとか言っているうちにどんどん時間がたって、なにしろ本がすごく厚いんですよ。だから、分冊で出さなければ無理だとか言いながら、結局は国学院の木下君が最後に責任を取るといって全部の翻訳を持っていったきり、そのまま終わっちゃって、本にならなかったんです。

その中の1節で外国人労働者の話をかなり書いたのがあって、それを紹介しながら、日本の外国人労働者の問題を少し書いたぐらいで、同僚の森

さんみたいにちゃんと分析したわけではないんですが、そういうものを書いた。

小澤 日本における外国人労働者ですか。

増田 ではない。主としてアメリカでした。

山本 いつの時代の？

増田 70～80年代。

山本 では、メキシコなどからの移民労働者の問題ですか。

増田 そう。

菅井 その後、国際労働研究センターではかなり重要な……。かつてはそういう海外の労働運動はあまり直接は扱っていませんでしたから。いつも海外から活動家、研究者を呼んだりしていましたけどね。

増田 研究センターに変えて以降、アメリカからLabor Notesの人達を呼んだりして、そしてその本も知ったみたいない感じなんだけど。だから、そんな意味ではアメリカの労働運動の新しい風をうまく吸収しようみたいなこともやったんだけど、アメリカは日本と違って、運動は明るいよね。

日本のは暗いよね、だいたいが（笑）。だから、なかなか日本の場合には難しいなという感じがします。今、日本で本当に明るいというのは、女性組織はちょっと明るいけれども、中身まで明るいかどうかというのはなかなかね。

山本 そのところ、もう少しお話してみてくださいませんか。はるか若い世代にとってはよくわからない話だなというか（笑）。

増田 日本は現在、労働運動で言ってみれば大単産クラスのところはもうほとんど表面的な運動は消えてしまって、連合の中になっていて、運動らしき運動をやっているのはほとんど中小とか、中小もなくなっていくつつあって、もう言ってみれば一人運動に近いような運動が現在の大きいところの……。ずっと昔から我々がつきあっていた連中がそういうところに多いので、言ってみれば外国人労働者もそういうところで組織化しているんですよ。

だから、それはもうどちらかという、もともと企業組織ではなくて個人組織で労働組合を作るみたいなかたちになっていますから、たしかにその運動はそれなりに一定に活発なのですが、なかなか全体に広がらないんですよね。

山本 それは日本の話ですよ。

増田 日本。だから、それなりの運動はあるんですが、それが大きくならないという問題があって、それはどこにあるのかという、日本の組織労働者のほうにかなり大きい問題があることは事実なんだけれども、組織労働者はほとんど動かなくなっちゃってね。

だから、国鉄つぶしというのは非常に効果があって、中曾根さんがえぼるのは当然だよ。官公労の運動がなくなってしまうと、日本の場合、民間での運動は、なかなか大きいところは運動がほとんど……。

そして今、中高年も含めて、ストライキの経験者がほとんどいなくなったから、日本でストライキはたぶんどできないのではないかな。ノウハウがほとんど蓄積されていない。ストライキは20年以上やっていないでしょう。だから、すごく難しいのではないかな。フランスやイギリスとは、そういう点でだいぶ違うよね。そういう感じがします。

菅井 増田さんの今までの集団の研究の中で、私がいちばん面白いと思ったのはスタグフレーションの分析ではないんですよ。イギリスに行かれたときに、労働者教育の報告をされたでしょう。そのレジュメが出てきたんですよ。それで読み直したら、やっぱり面白いですね。84年ぐらいでしよう。

増田 84年ぐらいにイギリスの労働運動指導者というのは半ば公教育の学校でやっていて、それが次の世代の活動家を育てているという報告でしたよね。ああいうのは日本ではありませんし、アメリカはレイバーセンターなんかで最近よく出てきていて、大学とタイアップしているというのがありますが、日本はまだそこまでいっていません。

それで私は、今総長のときにあれを実現して、二十数年前に書かれた論

文を思い出して、日本の労働運動活性化のためには大学教育の中でやるというのは、ある意味では必要なのではないかと思います、いかがでしょうか（笑）。

6. イギリス留学

増田 イギリスに行ったときに、留学の2年目ぐらいで、やっと私も英語がある程度しゃべれるようになってきたときに、戸塚さんと一緒にノーザンカレッジのマイケル・バラット・ブラウンという人と戸塚さんが親しくて、彼の家に行った。

ノーザンカレッジは、主としてヨークシャーの炭鉱労働者がやっている労働者教育の学校なんですね。大学ではなくて、そこを卒業するとオックスブリッジでもほかの大学でも受験資格が発生するというかたちで、あとは組合が許可すれば大学にそこから行けるみたいなかたちを取っているんです。

彼らのカリキュラムがなかなか面白くて、いろいろ勉強したんですよ。日本と非常に違うのは、抜けていく人があまりいないんです。だから、そこから育った研究者が大研究者になって、もう一回先生として戻ってくる。日本は立身出世でいなくなるのがメインですが、そういう意味でいうと、イギリスの階級社会はある意味で厳しくて、知識階級になっても本当の知識階級で出ていってしまう人は少なくて、きちんと帰ってくる人が跡を継ぐというかたちになっていますから、研究者も中で育つんだよね。そういうのを見て、それについていろいろ報告したことはあるんですよ。

それで、ついでに留学のところに来てしまいましたので。

小澤 テーマが三つ目のイギリス留学に移ったわけですね。

増田 私はよっぽど運動に縁があるのですよね。法政に入ったときもそうですが、イギリスに留学した途端に炭鉱ストライキが始まってしまったんですよ（笑）。私は日本でも三井三池に若干関係、関係といっても外野の

学生応援団ですが。

山本 支援に行ったと。

増田 支援に行った経験もありますが、日本の運動とすごく似ているんですよ。炭鉱というコミュニティは全世界共通のところがある。だから、イギリスで一番つきあったのは炭鉱の主婦の会なんですよ。日本の主婦会と同じような感じで、地域共同体の主婦会みたいものがあるって、そういうところでストライキを支えているんだけど、イギリスの場合、これは85年から86年まで丸1年続いたんですよ。

だから、私はイギリスに行って2年目はほとんどロンドンにいないで、ヨークシャーのほうに行っているみたいな感じで、帰ってきて『経済科学通信』に書いてくれといわれて短いものを書いて、ちゃんとしたものを書こうと思ったら、早川さんがその当時、大原社研の雑誌に連載しました。僕と一緒に留学してあちこち一緒に行って炭坑の中にも入りました。今回彼は退職して本にまとめましたので、なかなか面白く書けているのではないかと思います。

これはいろいろところで話しましたが、イギリスの騎馬警官というのはすごいなと思いましたね。なにしろデモでスクラムを組んでいる中を馬で駆け抜けるというのはすごくて、血だらけですよ。だから、やっぱりバーバリアンだなと思って。

鉄砲で撃つなんていうよりも、どちらかというと、もっと凄惨だよ。

小澤 炭鉱ストライキの最中にですか。

増田 最中。それが毎日繰り返されているんだから。ピケを張り、それを騎馬警官がぶち破って、それが毎日テレビで放映される。現場で見たときは、さすがにすごいですよ。ちょっと恐ろしいような感じがして。

井上 日本の警察のほうがやさしいよね。

増田 日本の警察なんか全然かわいいなと思ったぐらい。だけど、これは結局あれだけ1年間やって、完全に惨敗なんですよ。

この間に、炭労のスカーギルが委員長ですが、その書記長と、それから

日本にも来ましたが、チェスターフィールドというところにある支部の支部長と非常に親しくなりまして、その人たちにいろいろ案内されてあちこち歩いて、そのころは英語が結構よくわかったんだけど、やっぱりだめだね（笑）。

そのときも戸塚さんに言われたんだよね。「君、これを持続させるほうがよほど大変だ。日本に帰ってきてても、トイレで30分勉強しろ」と言われたんだけど、すぐだめになって、元に戻っちゃった。その頃はヨークシャーなまりすら、かなりわかったぐらいのところまでいったんですが、元に戻っちゃって、山本さんのドイツ語の爪のあかでも煎じて飲まなければだめだ（笑）。

柿崎 先生がイギリスからお戻りになって、三浦半島の大学の寮でやった古川・南さんの研究会で、帰ってすぐ報告をされたと思うんですが、すごく興奮してしゃべっていたじゃないですか。本当に感激いっぱいという感じで。

それでそのあと『経済科学通信』というか、あちらのほうで基礎研か何かで報告されたのではないですか。1年ぐらい、この炭鉱の話をしていましたから、そうとう印象が強かったんだと思います。

井上 この時期は、増田先生は80年代の半ばから後半にかけてというのは、フランクみたいな世界経済論も熱心にやっていた時期ですよ。

増田 そうそう、やったよね。

井上 僕は分厚い原書を全部訳してごらんとと言われて、訳させられまして、ちゃんとコピーして提出したんですが、あれはどこに行ったんでしょうか（笑）。

それはともかく、だから、この時期は炭鉱ばかりやっていたわけではない？

柿崎 もちろんそうですが、すごい興奮状態のときでしょうね。印象が強かったんだろうなと思って。

増田 「イギリス資本主義の危機とサッチャリズム」というのを、一応

イギリスの2年間の留学の成果として書きました。

柿崎 僕は先生の論文の中で、これが一番好きです。一番しっかりしていると思います(笑)。

菅井 80年代の増田さんはものすごく充実していましたよ。活気にあふれていました。すごい。80年代って、40代、50歳になろうとした頃でしょう。

小澤 ちょうど経済学部が多摩キャンパスに移転した年ですね。

増田 経済の教員というのは、いちばん勉強する中心的な時期に、だいたい大学の移転で全部動いていたね。

山本 留学で今でも僕が覚えているのは、法政の場合は、とりあえず1年間の留学を認めると。行っているあいだに、途中で延長願いを出すんですよね。その延長願いを増田さんがイギリスから送ってきて、教授会で紹介された際に、どういう文句であったかということ、「炭鉱ストライキがあるから、私はもう1年いなければいけない」(笑)。

「炭鉱ストライキがあるから」と、「もう1年いなければならぬ」のあいだに、「研究をやるから」という文言が必要なはずなのに、その研究がなくて、ただ単純に、炭鉱ストライキがあるからもう1年いなければいけないと、どうもそういう延長願いだったんですよ。

だから、それを茶化している人があの当時、何人もいましたよ。炭鉱ストライキと増田さんの滞在と、どういう関係があるのって、みんな言いながら(笑)。

井上 でも、いろいろなことが挿入できますよね。支援のためにとか。

山本 そう、支援するのか研究するのか、よくわからないよねという感じで(笑)。

柿崎 長いつきあいなんだろうなと思うのは、2006年に同じ研究会のメンバーで鈴木さんという方がイギリスに行かれて、そのときに一緒に行ったんですけども、ヨークシャーのほうについでに行きまして、おそらく炭鉱の方に会いにいったんだろうと思って、調査なりを一緒にやっ

た研究者と。ずっと引き続きつながりを持ってというのは、やはり印象が強かったんだろうなと思いますね。

増田 イギリス留学に行ったのか、炭鉱ストを見にいったのか、よくわからないね。だけど、ああいう大騒動になると、いろいろな意味でその社会がよく見えるよね。ほころびが全部出るからね。

7. 中国での体験

井上 先生が中国に行かれたのは70年代の半ばですか。

増田 中国は、最初は77年です。

井上 だいぶさかのぼりますね。

増田 海外旅行のいちばん最初は中国。

井上 それで帰ってきて、我々に何時間も土産話をしてくださったんですけども、その土産話がまた面白くて、「おい、井上、明の十三陵はすごかったぞ」とか、中国には美人が多いなんていうことを一生懸命話されて、「吉永小百合みたいなのがゴロゴロいる」というんですよ（笑）。ああ、増田先生の美人の尺度は吉永小百合だったのかと、よくわかったんですけど。

そのとき、僕はまだ学生か院生ぐらいだったのですが。

菅井 77年って、あまりまだ中国に人が行かないときですね。

井上 まだ文革が終焉したばかりのとき。

増田 いわゆる都市の開放がほとんどなくて、中国にいちばん最初に行ったのは研究目的の調査団。要するに、日本の満州国に対する虐殺の歴史についての研究で、これも実に面白いいろいろな人達と団を形成して行ったんですが、大学のときの同僚の清川君というのがセッティングしてね。これも面白くて、京大の農学部、医学部と、それから東京はだいたい研究者ですが、まだ院生ぐらいのすごく若い人が2、3人。それから中国語が話せる人が必要だということで、そういう院生など、いろいろな人達と団を

組んで。

井 上 期間は、2週間ぐらい行っていらしたんですか。

増 田 3週間ぐらい行っていた。ほとんど全部東北だけでしたから。だから、北京に入ったんですけれども、そこから大連に行って、長春に行って吉林に行って、ハルビンまで行きました。

井 上 文革は終了しているんですけれども、田舎のほうに行くと、まだその余韻が残っているみたいな。

増 田 遼寧省はまだ紅衛兵がデモをしていました。

井 上 先生はいろいろ土産話をしてくださったんですが、僕はそのとき、いささか文革に対して過大評価なのではないかと思いながら聞いていた記憶があるんですけれどもね。

増 田 その頃というか、矢吹氏もそうだったかもしれないけれども、私は意外と山内一男さんには批判的だったんですよ、本来は。山内さんがあまりにも文革を褒めるから、もう少し客観的にやったらって。「そういう君みたいな態度では、世の中なんかわからない」とか言われて。だけど、どちらかというとな文革自体がそんなに悪いものだという認識はあまり持っていなかったんですけど、その後の結果で、いろいろな事態がわかってくるということでもまだなかったですからね。この座談会は『経済志林』に載っています。

ただ、あの中国の人を動員する運動のすさまじさというのは、ちょっと日本と違うよね。だから、そういう意味ではすごくてね。でも、我々は町を歩けないんですよ。77年のときは、全部バス移動。でも、しゃくに触るから……。

要するに、通訳のすごくきれいな女性、それが公安のスパイでもあるんですよ。それで私が朝飯前に町を歩くというのが、ばれたんだよ（笑）。そうしたら呼び出されて、本来ならこの場で強制退去だけど、1回だけ許すから、次にもう1回やったら、あなたは退去にさせていただきますって。

だけど、何でわかったんだろう。そうしたら、出ていくのがわかるんだ

ね。

山本 当たり前じゃないですか、そんなこと（笑）。ホテルで見ているでしょう。

菅井 今だってそうらしいから、あの当時だったら、もっと監視がついていますよね。

井上 そういう人たちが吉永小百合に似ていたわけですか（笑）。

増田 すごくきれいなかわいい顔をしていて、そんなことをやるのかと思ってさ。

それで都合の悪いことは訳さないしね。だから、現場で聞くでしょう。聞くときも、こちらの中国語がわかる人に、ちゃんと筆記しておいてと言うんだけど、我々の質問も全部訳さない。だから、何かへんな答えなんだよね。そうしたら、通訳者は自分でだめなものの基準を設けているから、全然通訳になっていない。

だから、工場に行って生産のコストなんかを聞いてもへんな答えばかりしているから、そういう点では非常に……。中国にはその後、何回も行ったけど、あの最初の印象が強かったですよね。そして、全員がまだ中国人民服でしたから。

小澤 その後に行かれたというのは、何年ぐらいですか。

増田 その後、柿崎さんたちと行ったのは、いつだけ。

柿崎 94、95年ですか。だから、昔のことを回顧して、もう全然変わったって。特に人民服のことはよく言っていましたよ。

増田 なにしる靴は革靴ではなくて、ほとんど布の靴だし、女性の上下はほとんど人民服だったから。ハルビンに行ってバレエ団の練習の見学というのがあった。そうしたら、タイトスカートでスタイルがきれい。中国での生活が2週間か3週間たっているじゃない。人民服しか見てないわけだから、みんな感動してしまって（笑）。

人間ってすごいよね。だから、誰でもきれいに見えちゃうんだもの（笑）。

柿崎 我々が行ったときは、もう完全に。

井上 それがそうでもないのは、僕は90年代に入ってから行ったんだけど、奥のほうに行くと、内モンゴルの辺りまで行ったら、やっぱりものすごいですよ。裸足ですよ。一方でベンツに乗ってデパートに乗り付ける中国人がいるかと思うと、もう一方で裸足で物乞いしている人たちがいる。手前のほうではなくて、奥のほうですけれどもね。

増田 中国旅行では2006年ぐらいかな、シルクロードからカザフまで行ったんですよ。それはカザフの石油パイプラインが上海に通じるというので、通じたか通じないかの結果を見るという元新聞記者と一緒にね。あんな旅行はもう二度とないと思うんだけども。

菅井 それは取材なわけですか。

増田 取材を兼ねてね。それで、ウルムチからずっと国境地帯まで延々と2週間車で走りっぱなし。それで最後はアラシャンコウというところから国際列車でカザフに抜ける。だから、すごく面白かったけど、新疆ウイグル自治区というのは中国じゃないね。どう考えても、宗教もイスラムだし、食べているものもシシカバブーだしね。そして、治めるためにそこに大量に漢族を入れているわけ。だから、漢族とウイグル族が年中对立するという構造。

何しろ伊寧というところに中国で唯一レーニン像が残っているという話を聞いて、それを見に行こうといったから、日程がね。それ、すごく遠いんだよ。それでそこまで本当に行ったんだよ。そうしたらレーニン像がないんだよ。それで町の人に聞いても、そんなのは知らないとか、教えないのか、知らないのかわかりませんが。

それで、かつての党の本部みたいなところがあって、それはホテルになっていた。そうしたらホテルの庭先に、きちんとまだありました。

山本 どのくらいの大きさの？

増田 全部そのまま。

山本 等身大？

増田 等身大ではなくて、あれは座像かな。ちゃんと花が飾ってあっ



柿崎繁氏

た。だから、ウイグル族にとってはレーニンとは相変わらずで、別に批判的でもない。

そのようなこともあって、いろいろありましたけどね。

柿崎 例の再生産構造研究会で、先生とは2回中国に行っているんですが、そのときは北京、上海、蘇州。

増田 一回は香港から入って。

柿崎 そして上海から香港に入っ
て、それでチケットがなくて、先生が交渉してくれて……。それで香港に戻ってきて、それはちゃんと調査して、僕が大変な思いをしたんですが、全然手伝ってくれないんです。会社に全部手配して、結構いいところを回ったんですよ。

増田 深圳は面白かったよね。

柿崎 蘇州のグンゼの工場に一人日本人の代表がいて寂しい思いをして、接待しようって待っていたんだけど、我々は「もう早く帰ろう」って。要するに、日本人一人で頑張っているわけですよ。久しぶりに調査が入ったからというので。丸5時間ぐらいかかりましたよね、ベンツで。

増田 そこにグンゼの工場があってね。そこに日本人の支社長みたいな50代の人、一人だけ派遣されている。

柿崎 通信販売の雑誌向けのアパレルを作っていて、あともう一つランクの高いところもあるんですが、もっぱらグンゼのそんないいものではないと思うんですよ。そして社長は中国人で、これがまた大変な人物でいろいろあるんですけども。問題は、日本人の実際の工場長は、南米から来てすぐまた中国に派遣されている。本当にかわいそうなんですよ。

それでせっかく日本から来たというので歓待しようと思ったら……。まあ、結局、ヒアリングが詰まっていたんですけどね。あれもけっこう回り

ましたよね。

菅 井 深圳の調査ってよく日本人の研究者は行きますけれども、工場は多いんでしょう。

増 田 多い。上海近辺にも日本工場が多い。

井 上 上海は、どういう業種が多いですか。

増 田 繊維関係なんかが多いじゃないですか。

柿 崎 上海そのものは大和証券というか、相沢さんから紹介を受けて、日本の金融の問題で、ちょうどH株とかA株とか香港で出すという話で、日本も進出しているいろいろやりたいと。どういう対応をしているのかというのでヒアリングをしたんです。そういうのもあって、97年のときに、大きいところの工場という感じだったんですね。

それで2005年でしょうか、千葉商大のグループと一緒に重慶に行って、環境問題中心ですね。それで重慶に入って、三峽ダムにも入って。

増 田 三峽は遠かったね。三峽ダムに行って、武漢にも行って。

柿 崎 武漢に行って、上海に行って。

増 田 何をやったのかわからない。

柿 崎 でも、武漢大学では向こうの学者、あるいは民間の幹部とも交流があって。

増 田 揚子江と黄河の環境問題とか、そんなのを。

柿 崎 重慶ですかね、大雨にあってバスが水浸しになってという感じの、今の洪水のはしりみたいなのを経験して、そういう意味では構造研では増田先生が中心になって、好きなようにさせていただきましたね。

8. 再生産構造研究会とポスト冷戦研

小 澤 留学問題から、おのずと今度は構造研究、ポスト冷戦研のほうに話に移ったように思います。私はポスト冷戦研というのは一応承知しているつもりですが、再生産構造研との違いというのは、どういうこととし

ようか。

増 田 再生産構造研究会という名前に、いつしたのかはよくわからないのですが、古川・南さんの大学院生たちが……。南さんは法政を辞めて、千葉大にいつ移ったのかな。

山 本 79年か80年じゃないの。

増 田 南さんが移ったぐらいに、古川・南ゼミみたいなのところの院生OB、柿崎さんみたいなのが集まって、あと土地制度史学会の人たちと一緒に研究会を始めたんだよね。これはけっこう長いあいだで、ポスト冷戦研はいつだっけ。

柿 崎 94年ぐらいだと思いますけれどもね。

増 田 それまで再生産構造研究会を結構やっていました。

柿 崎 古川先生と南先生と一緒に、OBと現役の院生を含めてやっていたのが再生産論研究会で、それが三浦半島で合宿をやったり。

小 澤 それには私も参加したことがあります。

増 田 再生産構造研究会というのは、いつごろ始まったのかね。

柿 崎 南さんグループがいろいろあって、その後なんですよね。

増 田 90年代か。

柿 崎 古川先生の出版の92年ぐらいには、その前後にはできていたと思います。

増 田 古川さんが亡くなったのは90年？

柿 崎 90年。それで『危機における現代経済の諸相』が92年でした。

増 田 あれは古川さんの追悼の本を……。

柿 崎 追悼本です。それ以降に、たしか再生産構造研究会として、前と同じだったら面白くないので、「構造」をつけようということで。

増 田 ここでは本を出さなければ意味がないという人がいて、けっこう本を出してはきたんだよね。

柿 崎 それと調査も大きなところを、大企業の反主流派を中心に回ったんですよ。それで調査もやって。

増田 調査は労働運動だけだよ。この本にはあまり直接反映されていないのが多いかもしれない。

柿崎 それでも『長期不況と産業構造転換』の自動車とか、それぞれ書いた人には調査は生きているんだと思います。あと雑誌「労働運動」に、あまり好きではないからペンネームにして（笑）。

増田 実名だとほかの人から文句を言われるって、ペンネームを使って書いた。

山本 何に？

増田 「労働運動」という共産党の機関誌。そこに名前を書くと、私なんかはいろいろ都合が悪い。

柿崎 それのおかげでいろいろ労働組合を紹介していただいて、実際トヨタなんかはずいぶん昔と違って、反対派も含めて自由に研修会に参加させたり、変わってきた印象はありますよね。だから、精密な組合体制というか、労使関係を濃密に作り上げてきているという印象で、僕はあのときはじめてトヨタ労組の反主流派の人に来て、すごい印象を受けましたね。だから、相当トヨタというのはうまいかたちで。

増田 左派を別に敵視しなくても大丈夫みたいな、強い組織になっているね。

山本 再生産構造研究会は、そういう労働組合運動研究会でもあったわけですか。

増田 本来は日本資本主義分析なんだよね。だけど、労働もいっぱい入っていたから。

柿崎 日本資本主義分析で批判的に検討して展望を打ち出せるかなと、狙いはそういうことでやってきまして、労働運動についても報告してもらったり、ヨーロッパで問題になっていることや、何人かそういう労働関係の方をお呼びして報告いただいて、増田先生はそういう運動も知らなければならぬということで、報告をお願いしていただいたという経緯があります。

山本 それでその再生産構造研究会の最初の本が、有斐閣の教科書ということですか。そういうわけではないんですか。

増田 これは鹿島君という私の親しい慶應出身の人が、有斐閣から左翼の本が出なくなるから、何か1冊出しておいたほうがいいですよ。「それでもうからなかったら私も首をつらなければならないから、採算が合う本でなければまずい」というので、そうしたら教科書になった（笑）。それでも出さないよりはいいだろうというので、一応マルクスを掲げた本を書こうというので、これを。

それで各大学に売る人がいないといけないというので、原論の先生を載せないとうちで売ってくれないというので、私は原論を持っていないから小澤君と原さんにも書いてもらって、そして各大学のマル経の原論を持っている人に、三つか四つの大学があれば1000部ぐらい売れるだろうと、甘い考えでね。

そうしたらこれはすごい版を重ねて、初版は14刷りまで出て、それで新版を出して、新版がもう3刷り以上出ているよね。だから、これはけっこう誰かが使ってくれていて、長寿だよ。

山本 小澤さん、使っているんじゃないですか。

増田 小澤君は途中で使わなくなったんだよ（笑）。

柿崎 構造研としては、『現代日本産業の構造と動態』が再生産構造研究会編著で出しているものです。あとはそれぞれ増田編著等というかたちで出していますが、構造研究会としては『現代日本産業の構造と動態』ということになります。

井上 この時期は再生産構造研究会はポスト冷戦研究会ですか。

柿崎 ポスト冷戦になるんですよ。この再生産構造研究会というのも微妙な位置ですけども、これは増田先生としょっちゅう飲む連中が集まって出している。それとは違って、ポスト冷戦研というのはもっと広くて、昔の古川・南先生たちがやっていたものを広げて。

増田 ポスト冷戦研というのは、土地制度の脱退派、要するに二瓶さ

んが土地制度史学から追放されちゃったんだよ。追放されたというかいろいろあって、それで何しろ土地制度の名前もあんなふうに変えたでしょう。それでどちらかというと経済史の連中が中心になってしまって、山田さんの理論のほうがほとんど参加しないような状況になってしまった。それでしようがないというので、理論のほうだけ別にちゃんと固まっておいたほうがいいなというので作ったのがポスト冷戦研究会です。

山本 どのくらいの頻度で活動していたんですか。

増田 これは毎月やっています。今でもやっています。

柿崎 長いんです。名前は再生産論研究会からこれに変えたりしていますが、70年代からずっとやっています。それでそれなりの人数も集めていますし。

増田 毎回、20～30人は出ているね。

柿崎 それで7月には基礎研と合同研究会をやって50～60人集めているんじゃないですかね。そういう意味では、非常に継続的に。

それで先生が総長をされたので、代表が今、専修大学の矢吹さんに代わっていますが、恒常的にやっています。

増田 会場は明治、専修が多いね。柿崎さんがいるから。

山本 今どき毎月集まる研究会なんて、ほとんどないように思うけれどもね。

増田 けっこう頑張ってやっているんだよね。

柿崎 そういう意味では、左派というか、日本の変革をそれなりに考えて、立場はそれぞれありますが、そのために必要な分析あるいは理論は何かということで、かなりはっきりしています。ですから、考え方が違う人も、ちょっとはあいつらの考えを聞いてみようかという人もいらっしゃいますので、へんに水を薄めないで好き勝手なことを研究しようということとでやっています。

それと代表が代わられたのであれですが、増田先生は最初はこんな乱暴な、ちょっと言葉は悪いですが、ヤクザな先生はいないなと思ったのです

が、細やかな配慮で研究会を運営していただいて、論点開示など非常に目配りしているというのを本当に感じましたね。だんだん年をとって穏やかになってきましたが、僕は院生時代にはストレートにいろいろ言われまして、これは大変な人がいるなと思って。

菅井 口が悪い、みんなそう言っていますよ。もうすぐ好々爺になってしまう（笑）。

柿崎 師匠がそういう意味では山田シューレというか、古川・南というか、山田さんみたいに、あれは凝り固まっていたんですが、きちんと批判というか、そういう意味では相対化するという事を見させてもらったというか。それでも私は信奉者であることは間違いないのですが、非常に広い視野で問題をとらえるということ、いろいろなかたちで指摘してもらい、あるいはそういう研究会の運営でも……。

増田 ラテンアメリカからアフリカまで研究会でやれとって、土地制度のおじいちゃん方は頭がクルクルになりながら、年寄りを出てこなくていいからって。だけど、アフリカとか、話を聞くと面白いよね。だって、我々は全然情報がないじゃないですか。だから、日本でアフリカ研究者なんて本当に数えるほどしかないから、探するのが大変なんだよね。

突然電話して、「すみませんが、今度、報告してくれませんか」って。あなたは誰ですかと言われて、誰々の紹介であなたがいいと言われたので。東大の誰々とか、日本でも4、5人しかないと言って、一人いい報告者が見つければいいんだけど、たまたま報告してくれた人が全然つまらない報告をすると、「だめだ、こりゃ」とか、そんなのも結構あったけれども、そういう意味では視野はけっこう広げたよね。ゴリゴリの南シューレはかなり薄めたつもりなんだけれども（笑）。

柿崎 そうですね。それと若い人たちにできるだけ報告させるということもかなり意識しましたので、そういう意味では幅広く、そうは言ってもある程度、世界経済のとらえ方は類似した人が集まっていると思います。

9. 地域開発

小澤 それでは、次の地域開発というテーマに移ります。

井上 これは論文などはないんですか。

増田 これは経過を話さなければいけないんだけど。これもまた古いですが、70年代の中頃、私が大島さんのもとで経済理論学会の幹事になったぐらいのときだと思うんです。今は論説委員を終わって定年でお辞めになりましたが、毎日新聞の今松さんという人が突然訪ねてきて、『エコノミスト』に学会紹介というのを書きたい。経済理論学会を説明してくれと。

誰に紹介されたのと聞くと、古川さんに増田のところに行けと言われてた。だけど、私がへんな紹介をして、また代表幹事のおっかない人に文句を言われるのはいやだと言ったら、誰に聞いたというとすぐにばれるから、そんなことを言ってもしょうがないでしょうと言いながら、それで今松さんと親しくなって、今松さんは意外と地域開発や環境などにかなり関心もっていて、あと矢田さんですね。

矢田さんと今松さんと3人で、ちょうど新全総のあとで、地域開発の大規模開発が始まった頃で、むつ小川原とか志布志、それから苫小牧東部をブラブラして、今松さんがいろいろコネクションをもっていて、地域の運動をやっているような人たちといろいろ話すということであちこち、夏に必ず1回行くというようにして結構やっていたんですね。

そういうのをやっていて、苫小牧の東部が一番行っている回数もあって、中の運動の人たち、もう大変なんだよね。組合の人たちと市民運動の人たちがあまり仲がよくなってね。それで本体がつぶれてしまうから、よけい大変なんだよね。何しろ荒れ地で荒野だから、住んでいる人はいないから、農民はちょっとしかいないから、土地を買収するのは簡単だったんだよ(笑)。

だから、買収は簡単なんだけれども、企業はなにしろオイルショックになって全然来なくなってしまったから、そんなのでそこをどうするかという計画が紆余曲折しながら、現在までトヨタがいちばん最後に来たのかな。トヨタの部品工場と、いすゞかな。

山本 いや、苦東のほうに来たのはエンジニアリング関係だと、いすゞになります。トヨタはそれとはまったく無関係に苦東の西側の苦小牧市内に立地したんですけれどもね。

井上 あれは部品だけですよ。

山本 そうです。

井上 雇用量はかなり多いですね。

山本 それは苦小牧の中で今、一番です。

増田 生産量としてはすごいんだよね。

山本 アルミホイールの生産から始まった工場です。

井上 ホイール以外にも、もう少し複雑なものを作っていますよね。

山本 ええ、オートマチックトランスミッションと四輪駆動車用トランスファーを生産しています。

柿崎 それは苦東とは別なんですか。

山本 苦東ではありません。昔からの苦小牧港のいちばん奥のところですよ。

増田 苦小牧港自体の開発地域が、まだいっぱい空いているんだよ。

井上 それで増田先生自身が実際に何か書かれたのは最近のことなんですけど、僕らが大学や大学院の頃によく話をされていたんですよ。苦東に行ったとか、志布志に行ったとか、いろいろなことを我々に話してくださいました。

それで僕は青森に行ったんですけれども、青森では東京なんかと違って、経済学部や経営学部の中での地域経済論とか経済地理学というのは、大都市部だと周辺科目になりますが、地方に行くとメイン科目になるんです。

特に青森なんかは、一全総から四全総まで全部エントリーして、全部失

敗しましたから。それで経営学部で地域経済を持ってくれと最初に言われて、僕はどうしようかと思ったのですが、増田先生がいろいろ話してくださったのがヒントになって、ありきたりの有斐閣なんかで出ている地域経済論の本は使いたくないですから、しょうがないから自分でむつ小川原に行ったり、大鱈リゾート構想に行ったり、あちこち走り回ってシラバスを組み立てました。

先生から聞いていた話が刺激になりましたね。ただ、実際にシラバスを作るときの材料にはならないんですけども、院生時代には非常に面白く聞いていました。

増田 たしか、むつ小川原は石油にかわる前のいちばん最初の計画でもって、湾を埋め立てる港湾工事が始まったところに、村長さんがすごく偉い人で、その人が反対運動の中心になって。

菅井 寺下力三郎さん。

増田 うん。その人が、なぜこういう開発が行われるのか、きちんと理屈立てて説明できる論理がないと、反対運動といっても、我々はこの地域を現状のままでもいいというので反対しているとかたちになってしまって、「では、お前らは貧困でいいのか」という対案を出されて必ず負けるというんだよね。だから、どうしたらいいかというと、自分たちもある程度豊かになるみたいな話が全然ないような理屈では、開発にどうしても勝てないというんだよね。

では、どうしたらいいか。そういう再生を対案として考えてくれない限り、反対運動なんかいくらカッコよくやってくれても何も役に立たないって、その村長さんはかなり厳しい人ですよ。対案を持ってこい。

菅井 その人は朝鮮窒素に最初勤めて、それから群馬県の渡良瀬川の上流の桐生に来て養蚕の技師をやって、そこで足尾の鉱毒を見て、あそこから嫁さんをもらった。それで六ヶ所から迎えに来て向こうに行った人ですから、そういう歴史がある人ですから、もう全部知っているんですよ。朝鮮窒素の差別構造というのを。

井上 地元の大学の先生方などがいろいろな調査をして、いろいろ反対の議論を組み立てれば組み立てるほど、地元の人たちは離れていくんですよ。それでは我々はどうすればいいんだ、我々は馬鹿かと、そういうかたちになるんですね。

増田 そうなんだよね。単なる教条主義が多いんだよね、論文は(笑)。私もそれに近いけれども。

井上 仙台の大学もそうですね。持ってくれば持ってくるほど、地元の人たちは離れていきます。おれらのことを馬鹿だと言っているのかと。

増田 そうなんだよね。意外と見下してしまうんだよね。難しいよね、本当に。

菅井 70年ごろ、原子力コンビナートという計画が出た。あのころから再処理工場が予定されていたのだと私は見えていますけれどもね。

増田 何しろ、あそこはゴミ溜め場だからな。次から次へと出てくるのが、みんな危ないものばかりだもの。

柿崎 1970年代からそういう調査をやっていて、論文としてもこういう……。

増田 今松君は新聞なんかには書いちゃうでしょう。そうすると、「そろそろまとめない？」と言っても、ノートはたくさん取ったんだけど、そして山本さんみたいな人がいるときれいにまとめてくれるんだよ(笑)。私らは、聞いているうちに面白いからさ。

それで、その日のうちにというのが原則だと、もう何回も戸塚氏に言われているんだけど、その日、宿に帰ったらその日のメモを全部整理しないと、翌日になったら、まず数字が狂ってくると。そうすると全部が狂っていくからだめだと言われているにもかかわらずね。だから、ノートのメモすら、何を書いたかよくわからないみたいになっちゃうじゃない。だから、その辺がもともと調査屋に向いていないんだよね。

山本 いや、それでも僕が法政に来て感心したのは、僕は全然知らなかったけれども、増田さんは経済政策という科目を持ちながら、やってい

るのはどうもレーニンの『帝国主義論』だと（笑）。あるいは独占理論であるとか、そういうことをやっている先生らしい。つまり、言ってみればマル経の経済理論に凝り固まっている人らしいということは何となくわかってきたけれども、この増田さんが意外に現場に行つてというか、現場を見ることがどうも好きらしい人であると、そこに僕は感心したんですよ。

だから、冒頭に言いましたが、今松さんと矢田さんとで、どうも毎年夏にあちこち話題の場所に見学に行っていたらしい。僕が来た82年の夏も、「行こうと思っているけど、お前も来るか」と言うから、ぜひ行きましょうと。でも、どこへ行くかをアレンジしたのは増田さんではなくて、今松さんですよ。ここに行きたいという希望を出すのは増田さんだったのでしょうけれども（笑）。

たまたまその年は今松さんが仕事の都合で、アレンジはしたけれども来られなくなって、それで僕と増田さん二人で現地で落ち合ったのかな。忘れちゃったけれども。

最初は熊本の九州NEC。話題になったばかりだったからね。そしてそのあと延岡の旭化成に行つて、そして大分の新日鉄。増田さんはお金があったから、飛行機で行き帰り（笑）。その当時はまだ飛行機の値段は高かったはずなんだけれども、僕は飛行機で帰るよって、大分空港から帰った。

私はそんなお金はありませんので言つて、当時話題になりかけていた湯布院に立ち寄つて、安い宿を探してね。

菅 井 何年頃ですか。

山 本 1982年。その当時はまだ湯布院も1泊5万円とか、そんな宿はないんですよ。まだその当時は、そんなに高くはなかった。

柿 崎 ダムの話、どうのこうのというのは、湯布院はなかったですか。

菅 井 自衛隊の基地がどこかありますけど。

山 本 当時、湯布院はとにかく町おこしで有名になりかけていたんですよ。玉の湯のご主人などがそのころは若くてね。

それから博多に出て、その当時はじめて博多に行つて、こんな立派な地

下のショッピング街を作っているのかとびっくりして、それで帰った記憶がありますが、そのことはともかく、それが最初。

それでその後も毎年行くのかなと思ったら、だんだん増田さんも疲れているのか、それとも今松さんが忙しいせいなのか、ずっと何もなかったんですよね。何もなくて、もちろんそれは移転関係でたいへん忙しいときでもあり、移転に絡んでカリキュラム大編成をやっていたんです。そのいわば学部内の元締めの仕事をやっていたから、とんでもなく忙しかったことも事実で、それでイギリスに行っちゃったでしょう。だから、この活動はほとんどなかったんですよ。

なかったんだけど、いつの頃だか今松さんにせつつかれて、まとめなければいけないと本人も思ったらしい。それで僕に、お前も入りなよと言って、それでいきなり苦小牧に連れていかれたということです。

井上 実際の原稿は2000年代に入ってからになりますね。

山本 『なぜ巨大開発は破綻したか』は、2000年頃でしょうね。とにかく出さなければならぬと言い出したのは。

柿崎 今松さんに言われたからじゃないの？

山本 今松さんから言われたか、せつつかれたかなんですよ。

井上 このときは、あまり細かくノートは取っていらっしやなかったんですか。わりとアバウトな論文という印象があったんですけど。

増田 調査の細かいことはいっさい書かないということで、そんなのはページ数が全然足りないし。

山本 苦小牧に久しぶりに行ったときは、何度も来ているんだと威張るわけですよ（笑）。でも、何度も来ていると言いながら、一度も王子製紙を見に行ったことがない。じゃあ、見に行きましょうよって。王子製紙は苦東ではないけれども、苦小牧のことを知るには王子製紙を見なければだめよと言って、それで、じゃあ真面目に王子製紙も見ようかと。

増田 10回目ぐらいで、山本君と一緒に王子製紙にはじめて入った。

井上 苦東には10回ぐらい行かれたということですか。

増田 10回以上行ってたんじゃないかな。70年代にけっこう行ったから。

山本 ところが、苫東に立地した工場に一回も入っていない。

増田 だから、テント場に行って反対運動のオッチャンたちと話したり、そんなことばかりやっているから、工場のほうに行かないんだよ。

菅井 それはそれでいいんじゃないですか。

増田 そっちはそっちでね。でも情報をちゃんと両方から入れないとね。

山本 開発の成果はどんなものかというのは、そこに立地した企業に行って聞かなければだめよとあって、今度はこっちが連れていって、工場まわりをしたり。

増田 山本さんが来てから、企業のほうをダーッと回るようになった。

山本 なかなか面白いところもありますし、危ないなと思うところもあったし、これで大丈夫かねとか。苫東では開発会社がつぶれて、結局は不動産管理会社に。もともと不動産管理会社みたいなものだけでも、本当に不動産管理会社になって。

増田 完全になってね。

山本 見に行けば、明らかに失敗したようなものだよなと思いながら、それでもアイシン精機が10年以上前に買った土地がやっと生きて立地しちゃった。

増田 よくわからないね。

山本 開発などというものは、それは数十年単位で見ないとわかりませんよという感じもあることはある。でも、あれは1960年代からとてつもない巨大開発をしようとしたものがオイルショックを受けて、日本で全部作るなんて、それは無理よと。

菅井 だから、工場団地を造ったけれども、土地が余っているところはいっぱいあるでしょう。私は全部あそこに太陽電池を入れればいいと思うんですけどもね。あれだけで、ずいぶんできますよ。

井上 オイルショックというのはきっかけで、オイルショックがあろうとなかろうと、プランの段階からそんなにうまくいかないですよ。僕なんか青森にいと、一全総から四全総まで、地域を疲弊させるために作ったプランではないかと思うぐらいの結果ですよ。

つまり、みんな例外なく赤字を抱えるわけですから。それこそ県全体が夕張市みたいなものですよ。あれは最初のプランから、一全総でも二全総でも三全総でもそうですが、中央省庁は何を考えていたんだろうかと思うようなプランですから。テクノポリスがあんなに一緒に走り出したら、共倒れになるに決まっているでしょうし、リゾートが30カ所も動き出したら、共倒れになるのは決まっているでしょうし。

それで青森も秋田もそうなんですけれども、みんな負債を抱えて動きが取れませんかからね。

菅井 負債を抱えさせる政策で、いやなものを結果的に押しつける。

井上 最後は廃棄物だけもらいました。

増田 だから、下からの地域開発と上からの地域開発は何が違うのかというと、真理は一つだとすると、どちらからやっても結論は同じようになる可能性もなきにしもあらずだよな。

だから、上からの開発は悪で、下からの開発が善であるという普通の論理で組み立てるでしょう。下からの開発というのも、すごく難しい。だっ



菅井益郎氏

て、金はないし人はいないし、予算はない。それでいったいどうやって開発計画なんか……。例えば市町村できちんとある程度プランを作って、この町の開発をしましょと考える素晴らしい町長さんがいたとして、どうやって金を持ってくるかという能力はまた別だからね。

菅井 大規模開発を考えたら同じ

になりますけれども、下から考えるときにはまず大規模開発は考えないと思います。それはできない、資本的にも。

増田 トヨタを入れるなんていうことは、まず考えないよね。

山本 実はこの本の増田さんが書いたのを、きのう初めて読んでますよね。それで増田さん、こんなことを書いたらout of dateの書き方だよと思うところがありましたよ。ちょっと読み上げて悪いんですが、冒頭で、「我が国の国土総合開発計画は戦前の綿工業、生糸工業という繊維工業を基盤とするところから最後まで脱出できなかった段階から、戦後の重化学工業を創出するという日本資本主義の後発性に規定されていたため、市場の自由競争に依存することができず、国家の政策として上から強力で推進するために計画された」。途中まではいいですよ。

「このため、我が国の国家政策は先進資本主義諸国の国家独占資本主義と異なり、財政や金融という間接的な政策でなく、重化学工業創出のため、著しく産業に偏らざるを得ない性格をもち、企業に対するコントロールの強い国家政策となったのである」。

たぶん1970年代のあるところまでは、まあ、そういう解釈もいいけれども、80年代ぐらいから、かなり変わっていますよって（笑）、これが僕の読んだ直後の印象。

増田 おれの後半も変わっているんだよ（笑）。

井上 いちばん最後のところは、ずいぶん牧歌的なことを書いていらっしゃるという印象がありましたよ。つまり下から、地元、地域みずから動き出さなければいけないと。

菅井 それはいいじゃないですか。すごくいいですよ。

井上 いいんですけど、僕なんかは……（笑）。

むつ小川原開発の検証委員会というのがあって、県の大学の教員の中で僕だけが入っていたんです。それで東京にも何度も会議に来て、それから青森県の長期総合開発に携わったりいろいろなものに携わったんですが、地元からとか下からと言われても、そんなに……。いや、全国のどこかに

はそういうサンプルはあるのですが、そんなにうまくいくはずはないじゃないかという思いがあるんですよ。

それで何度も何度も失敗の繰り返しを戦後にやってきた。地元の人主導でも、失敗を繰り返してきたわけです。そのときにこんなにあっさり書かれると、ひどく牧歌的な印象を受けましたね（笑）。それで、「人がいいんだ、先生は」と、つい思ったんですね。

増田 散々だな（笑）。

井上 それから地域政策は環境と共生しなければいけないとか、いろいろ書いていらっしゃるんですよ。それはその通りなんですけど。

増田 そんなこと、一般論で言ってもしょうがないんだよね。

井上 そんなことを言っても、僕なんか、むつ小川原の開発を目の前で見えていますから、わりとアバウトに書かれてしまったのかなという印象はありましたね。

菅井 でも、方向性は内発的発展論をもうちょっと緻密にやるというのが……、私はね。

増田 そうだよな。それしかないよね。

菅井 それしかないと思います。そうしないとやはり上からの開発で、青森は特にそれでやられた。そう思いますよ。私も何度も行っていますが、本当にあれを見ていていやになります。

井上 だから、そのときにそれを言っただけでは、話は……。

菅井 具体的に何があるかね。

井上 ええ、可能性として。

増田 石油コンビナートと原発ではね。

菅井 ただ、あそこはやませが吹くから、今考えれば風力発電の基地として優れている。

井上 それでもう、全国47都道府県の中で風力発電の数が青森県が一番多いんです。ただ、それは全部、東京資本などで、地元は土地を貸しているだけなんです。

菅 井 東電の子会社とかね。

増 田 東電か。東京に来ちゃうのか。

井 上 うん。地元はみんなで金を集めて作ろうかというのと、いろいろな邪魔があちこちから入るわけです。だから、地元にいると話はその間に簡単ではないんです。

菅 井 だから、それはデンマークとかヨーロッパ的にやれば地元で金が落ちるんですけども、そうっていない。

井 上 なっていないですね。青森県は出力が一番多いんです。

柿 崎 だから、そういうことと、一般論としては、だけどね。

井 上 いや、いいですよ。ギャップがあるわけ。

柿 崎 個々の具体的な政策についてどうするかということでは、井上さんが言ったとおりでと思うけれども。

井 上 だから、そこをどう埋めるか、聞きたいなと思って読んだんですけども、ここで止まったのでは（笑）。

菅 井 でもそうしないと、あそこは今、再処理工場が2年運転延期になったでしょう。そのために約20億円の金が青森県に入らなくなった。それで、むつ小川原も数億。

増 田 要するに、再処理工場でも何でも来てほしいという話になるでしょう。

菅 井 だから、そうなっちゃったら、もう終わりなんですよね。具体的にどのようにするか、やはり増田さんが調べたのを生かさなければだめだと思うんですけども、そうならないで、もっと別のものを考える。そういう指向性をみんなが持たないと。困るとどんどん廃棄物だけ呼び込む。

増 田 そう、ゴミ溜めに。

菅 井 開発計画は廃棄物の捨場になっちゃいますよ。

増 田 志布志だって、結局あそこは何も開発しなかったから、結果としてはまあね（笑）。あそこは備蓄基地だけで。

菅 井 でも、そうやって拒否したところで、結構ちゃんとやっている

ところはいっぱいありますよ。だから、やっぱり青森は大規模開発にのせられたところがありますよね。

増田 だけど、中間で、例えば北海道がちょっと悲劇なのは、北海道開発庁という国の出先機関があるものだから道の力が事実上、下請けなんだよ。都道府県ならもう少し権限はあるのかもしれないけれども、それでも国家政策が下りてきた場合、自治体はだいたいね……。

山本 まあ、翻弄されるでしょうね。翻弄されるんだけれども、増田さんの地域開発政策のとらえ方が、上からの強力な指導でずっと一貫してきたと言われると、やはりちょっと違うのではないか。

国のほうの実際の指導力が強く、かつお金も回せた時代と、国のお金がなくなってきたときに、国は要するに強力な指導ではなくて、地方のほうからというか、あるいは自治体同士を競争させる政策。そしていいアイデアを出したところにはお金を少しつけてあげる。そういう政策に80年代からかなり変わってきているのではないか。

だから、強力な上からの指導でずっと一貫してきたと書かれると、ちょっと違うんじゃないのって。

増田 なるほどね。

菅井 そんなに面倒みはよくない。

増田 そうすると、もっと最悪かもしれないね。一貫のほうが、国が金を出すんだから、まだいいと言えればいい。

山本 今度は都道府県レベルだと、かえて昔はまさしく国の下請けでやっているみたいなどころがあったけれども、最近では自分でアイデアを出せるようになったと県の職員の人たちが自己評価というか、自分たちの仕事は前よりもクリエイティブになってきているんだと言っている福岡県庁の職員もいますよ。

菅井 北九州のエコタウンというのはどうなんですか。

山本 エコタウンも、言ってみれば、あれは北九州が独自に始めたのを国があとで追認して、それを全国あちこちに同じようなものをばらまい

ただけ。だから、そういう意味でエコタウンの開発も北九州の場合には、いわばあれはまさしく下から出てきたアイデアだと。

菅 井 アイデアは出てきたんでしょうね。

山 本 アイデアが出てくるだけではなくて。

増 田 違うだろう。真実、上からだよ。あれ、上から出てきたんだよ。

山 本 いやいや、アイデアが出てくるだけではなくて、ともかくもう……。

増 田 九大あたりが嘘を言っちゃいけない（笑）。

山 本 だから、矢田さんの言うことを信ずれば、北九州エコタウンのまわりは不安を抱えていたんですって。それを北九州市の職員の人たちがこまめに回って、言ってみれば説明活動をやるなかで、地元の理解を得てスタートをしたと。

増 田 最初の出発が？

山 本 うん、最初の出発が。

井 上 そうすると、70年代以降は地方のほうでの知恵なんかが、かなり働きやすくなったという考え方ですか。

山 本 働かさせるような仕組みに変わってきたと、僕は思います。

井 上 だけど、テクノポリス構想にしてもリゾート構想にしても、あちこちから出てきた計画書は……。

山 本 みんな似ているんですけども、だからテクノポリスも本当は国のほうは1カ所か2カ所ぐらいのつもりだったわけでしょう。それを地方が「うちのほうでもやってくれ」という中から。お金をばらまけないから、国のほうは地方をみんな競争させればいいと。

井 上 競争はいいんですけども、あの規模だったら、今度、函館テクノポリス、青森テクノポリス、秋田テクノポリスなんて成立するはずは



井上隆氏

ない。

山本 その通りでしょう。だから、あまりお金を出さない仕組みにするわけですよ。

井上 でも、県レベルでは、それでまた……。

山本 一生懸命やるわけですよ。

増田 だから、県が赤字になってしまう。

井上 ですから、中核工業団地なんてあちこちに造るんですね。全然、土地が売れていないのがいっぱいたまって、財政赤字を抱えているわけですよ。

山本 そうですし、それから現実にテクノポリスだと、言ってみれば先端産業の研究開発もそこに根づかせるというコンセプトになっていくはずなんだけれども、それで成功したところがどれだけあるか。比較的成功に近いのが浜松かなと僕は思うけれども、あとは厳しいでしょうね。

井上 厳しいですね。浜松だって目標の半分ぐらい。

山本 数値目標にはなかなかいかないでしょう。どれだけ浜松の都田のかなり外でやってきたものが、うまくいっているかどうか、僕も10年以上行ってないのでよくわかりませんが。

柿崎 その方式が成功しないと、例えば沖縄なんかは基地問題を抱えて、どうするのか。補助金政策だけでも、軍に依存する比率は今是非常に低いわけでしょう。結局、中から産業を興していくということがない限り、補助金政策でやるでしょうから、県の中から開発なり企画なり出てこないとだめだと、そのマッチングの問題ですよ。

おそらく今までの開発は、沖縄で成功しない限りは今後の展望はないのではないかと考えていますけれどもね。つまり政治的な焦点でもあるし、あそこがうまくてきれば。

菅井 大事なところは、みんな大きな基地になっていますから、土地はね。だから、そこをなくさないとなかなか難しい。しかし、沖縄独自の産業で、という生き方があると思いますけれどもね。それは知恵を出さな

いと。

井 上 いや、知恵がそんなに簡単にしたら（笑）。

柿 崎 沖縄だけは、お金が出るんですよ。だから、そういう意味で、そういうときに……。

井 上 有効求人倍率が、青森県は沖縄と一緒になんです。ビリを争ってね。それで軍事予算で飯を食っているのは、青森県もそうなんですよ。沖縄の次に、三沢基地が大きいですから。そして、今はXバンドレーダーサイトが車力のほうにもできて、防衛施設庁からの補助金はべらぼうに大きいんですね。そうすると原子力と軍事予算で何とか飯を食っているんですが、それでも有効求人倍率は青森県の場合、沖縄より低いんです。ときどき沖縄よりも上がるんですが、また下がる。

沖縄だってたぶん内部からそんなに知恵が出てくるはずも、動きもないだろうと思っているのは、青森で二十何年間見ていると、そんなに簡単に出てこないからですよ。

増 田 それはそうだよな。

井 上 いや、もちろん小さいものはいくらでも全国的に、何々県の何々村ではこうやったそうだと。

増 田 事例はね。

井 上 北海道の池田町のワイン場では毎年黒字が出て、町役場に金を出しているとか、そういう小さい事例はいくらでも出てきましようけれども、そういうのをたくさん積み重ねるしかないのかなとも思うんですが、それでも青森県なんかはそんなにたくさん出てこないでしょうからね。そうすると、あまり簡単に地元主導と言われると、おれは何をすればいいんだという話になりますよね。いろいろな市町村の開発計画などに携わっていて。

増 田 そうだよな。だけど何か知恵を出さないと、青森は死んでいいとは誰も言わないだろう。

井 上 出さないといけないですよ。ただ、青森県は夕張の次ぐらい

の市町村がいっぱいあるんですよ。大鱈なんていうのは、町長の年収が300万か400万落ちましたから。そこまで落とさないと、リゾート開発で失敗しましたからね。そういうのが至る所に累々とあるんですよ。

増 田 一昨年か、大鱈スキー場に行ったら人がいないんだよね。リフトだけ動いている。

井 上 あれは安比ができて、向こうに取られたということもあるんですけども。

増 田 だけど、僕はずっと前に行ったことがあって、スキー場としてはすごく広くて、いいスキー場なんだよ。青森で唯一の戦前からあるところで。ただ、旅館がない。ふつうの民宿みたいなところしかなくて、いわゆるホテルがない。だから、ふつうのスキー客はまず、あんなふつうの民宿みたいなところに泊まるのはいやだと。温泉であるにもかかわらず、なぜホテルがあまりないのか。

井 上 野沢温泉スキー場のほうは、まだ地元主導でうまくいっていますから。

増 田 東京の客が来るからね。大鱈は、青森から行くのだって大変だよ。

井 上 いや、青森から行く人は、みんな安比まで行っちゃうんです。

山 本 安比はまだ成功しているんですか。

井 上 いや、もうだめです。だって、もう日本中のスキー場、全部だめです。

増 田 なにしる若者が行かなくなっちゃったからね。

井 上 僕が青森大学に行ったときにスキー部員が四十数人いたのが、今はゼロです。とうとう学生スキー連盟から脱退したんですが、青森大学が脱退するということは、全国の大学もほとんど脱退しているんですよ。やる人がいないですから。

増 田 法政のスキー部いるぜ、いっぱい。

井 上 それは学生総数が多いですから。今、大学のスキー部は成り立

たないですよ。

菅 井 日本で風力発電を建てられる場所というのは、ものすごく少ないんですよ。人家と近いという関係でね。

それが青森には結構あるんですよ。それを東電の子会社とか日本風力開発とか、そういうところにやらせないで、自分たちでやる。それは日本の電力はものすごく反対しています。九電力体制を分解するといってね。ここは独占です。電力の独占分析をちゃんとやる人がほとんどいないんですよ。

増 田 あれは供給、配電を全部持っていてしまっているからね。

菅 井 そうなんです。だから、僕はそれだけでもかなり稼げると思うんですけども、今の日本の電力体制ではもうだめなんですよ。これを変えなくちゃ。政策というのは、そういうものだとは私は思うんですよ。

増 田 太陽光だって、買うシステムだけだものね。配電のシステムを持っていない。

菅 井 買うシステムは余剰電力ですから、経済政策的にはもっと問題ですよ。ドイツとかヨーロッパ並みにやれば、あるいは韓国だってそうやっていますから、風力発電に関してはなおさらそうですよ。向こうだと、絶対に地元収入になるんですから。日本だとならない。だから、それをなようにするのが経済政策で、そういう意味で大きな経済政策が必要なんだ。変わらないんですよ、そこが。

増 田 九電力体制を壊す。ただ、九電力体制を壊すと……。

菅 井 いや、アメリカみたいになりません。あれは流通だけでやっていますから。ヨーロッパ的にやるほうが、まだ可能性があります。

増 田 供給のほうさえしっかりすればね。

菅 井 そういう意味での経済政策をきちんとやる人がね。橘川さんなんかは電力分析をやっていますが、彼は九電力体制を守る側に立っていますから。いつも論争になるんだけど、これを壊す側になってやれば。

増 田 たしかにエネルギーは本当にきちんと分析すると、大変だよ。ね。

菅 井 エネルギー問題に対して、石油をやる人は多いんだけど、

電力は非常に少ないんですよ。本当にいない。ここは、がんだと思います。だから、青森は生きる道がありますよ。ほかにもいっぱいあります。それを探そうとしないで、目の前の補助金に頼っていくという構造はね。

実をいうと、私の田舎もそうなんです。柏崎なんですけれど。それで私はずっとやってきているんです(笑)。身にしみてわかっているんです。つまり、原発をなくしてもやっていけるような町づくりを、ずっと提案しているんです。ただ、それが今までは掛け声だけだったんですが、具体的な提案をしないとだめだということ。

井上 今度やっと青森県でも地元主導の風力発電会社が1社だけ出て、僕は非常勤監査役なんですよ。

増田 じゃあ、ちゃんとやらなければだめじゃない。

井上 頑張らなきゃと、思っているわけです(笑)。できるまでのプロセスで、いろいろなハードルというか、妨害が入るわけです。クリアするまで、何年もかかりました。それで一応新しく、外ヶ浜町というところが金を出して造るのですが、東京のほうから資本参加の要請があるのを断って、やっと1基か2基はできそうになっているんですね。あとはみんな東京の資本ですよ。それも東電の遠回しの資本。

増田 みんなそうなんだね。だけど、風力発電自体、そんなに高くないから、あれを造る費用ぐらいだったらね。

井上 それは何とかなるんです。ただ、売電の段階で。

増田 売るシステムをきちんと作らない限り、だめなんだね。

菅井 それは電力が握っているからね。青森はそういう点では、再処理工場を押しつけられる構造になっちゃった。しかし私はそこに逆転の何か芽があると思うんです。

増田 九電力体制は完全な地域独占だからね。

菅井 増田さんの独占分析のなかにぜひ入れてください。

山本 増田さんの話とは関係ないけれども、JRの新幹線の新青森、何であんな不便なところに造るんだろう。

井上 いろいろあったんです。

山本 中心となる駅を、なんであんな町はずれに造るんだろう。考えられないな。

増田 新青森よりも、先週函館に行ったら新函館はもっとひどい。何しろ沿線で、ずっと海岸線を来るんだよ。函館湾をこう回っているでしょう。だから、そこを真っ直ぐトンネルを2キロぐらい掘れば函館駅なんだよ。何でそれ、トンネル通せば……。

その土建屋さんが全部、何百億ってもうかるんだって。土地売買から何から。

井上 新幹線の新駅が街はずれになったのは、そのプランが決まったときに、そこに開発利益を持っていたのが地元財界の重鎮だった。それから今から17年前に青森公立大という市立大学が山の中にできたんですが、その土地を持っていたのは地元財界の重鎮。そういう話をし出したら、止まりません。

山本 コンパクトシティを標榜している青森なのに、それを壊すようなところにJRの新幹線の駅を造って、何だかよくわからないな。

井上 コンパクトシティをつくれと勧めたのは僕なんですけれども、実際はコンパクトではなくなって、膨張都市とか。

増田 すごく離れているよね。あれは町に行くの大変だよな。あれは空港と変わらないよな。何やっているんだろう。

井上 結局、向こうに決まったあと、本当は運輸省が、そのあと新幹線の技術が上がったので真ん中に戻しても大丈夫だと話を持ってきたのですが、もう戻せない。そのときは、今度は県知事のいわば後援会の幹部が、郊外開発主導なんですね。



山本健児氏

土地を市に買ってやるから、都心部にもう一回戻せという話は蒸し返すなという取引があったらしい。

木村守男が衆議院を辞めて、十何年か前に県知事選に立候補するときの出発式の記念講演というのは僕なんですよ。いろいろあったんです（笑）。いつかゆっくりお話ししますが、青森と秋田と岩手の開発に関してはいろいろなことを言いながら、いろいろななかかわり合いをもったものですから。

増 田 あんたも汚れてるんじゃない、結構。

井 上 いや、そんなことはない（笑）。あとで、結果的にそうなったということで。

柿 崎 開発の成功、失敗を、どこでどう判断するかは難しいところだと思いますよ。

井 上 それはそうですね。

増 田 短期と中期と長期があるからね。

山 本 いつだか、僕の法政のときの学生が長野県の王滝村のことをルポで書いたけれども、王滝村はスキー場開発で一時期は明らかに成功しているんですよ。ところが、そのスキー場開発に輪をかけて温泉開発をやったのが負債のもとになって、今はもう夕張の次ぐらいの位置になってきて、十何年かは成功の例、今は失敗の例。どれぐらいのタイムスパンで……。

井 上 それでも十何年か成功したと言われた時期がありましたよね。青森県の場合は、ずっと失敗の連続ですよ（笑）。六ヶ所をどう見るかというのも判断はいろいろありましょが。

というのは、この40年、県全体も各市町村も人口と所得は落ちっぱなしなわけで、今、最下位まで落ちたわけですから、成果はなかったんでしょね。10年ぐらい有効求人倍率は全国最下位で低迷しているというのは成功ではない。

山 本 だから、青森県も公共工事依存型の経済でずっときたんですね。

井 上 典型的です。

増 田 北海道と似ているんだよね。

柿 崎 開発の失敗の問題もあるかもしれないけれども、オイルショック以降の劇的な変化というか、大きいと思いますよ。だから、増田さんはそこを強調していたのはよくわかるのですが、例えば釧路なんかは今、もう3分の1ぐらいは生活保護を受けているような感じです。別に公共投資型でも何でもありませんけどね。

井 上 でも、あそこは無理な投資はやったよ。余計なことを、よせばいいのにみたいな。

柿 崎 いろいろあるからね、政治的なつながりがあって。

井 上 それで負債額を増やしたでしょう。

増 田 一緒に行ったんだよな。

菅 井 行ったんです。私も法政のOBの顔をして行ったけれども。

増 田 太平洋炭礦の最後をちゃんと見ようと言って。

柿 崎 人口減は大きいですし、200海里問題が転機になったから。

増 田 だって漁港と炭鉱がなくなると、釧路は産業が結局はないんだよね。

柿 崎 実際には夕張並みのあれなんですよ。だけど、政治的な力関係で残しているようなものです。

井 上 あの辺、鈴木宗男の地盤だよな。

菅 井 私はいつも増田さんに、お前はシングルイシューだと言われていますが、もう一つあるんです。私は鉱山の歴史の問題もやっています、北海道は田中正造のカバン持ちをした黒沢西蔵が、とにかく牛一頭借りて雪印乳業までいくわけでしょう。北海道は酪農の最適地だ、それで離れているから加工して出すんだと、それは成功したのにな。

だから、そういう意味では北海道はその芽はあると思うんですね。ただ、その何代目か後になったときに、黒沢西蔵の精神みたいなものを継がなくなって、ああいう不正事件をどんどん起こして、みずから雪印乳業は解体した。

だけど黒沢西蔵が見たところは、ここは日本の北欧にするんだと、そのくらいの理想があって、実際に実現したわけです。それが持続しなかった。私はそう思うんですけども。北海道のよさは、みんなが見ていますね。私の田舎もそうですが、どうしても補助金、すぐ目の前のお金に飛びつくところがあるんですけども。

増田 だけど、このまま温暖化が進めば、間違いなく北海道が米作の中心になるよ。もうかなり移っているみたいで、新潟はそろそろ危ないって言っていたから。どのくらい上がるのか知らないけれども。

井上 このあいだ山形に行って、サクランボの収穫はどうですかと聞いたんですよ。そうしたら、いや、もう秋田のほうに上がっていますというんですね。一番おいしい部分はもう秋田まで北上していて、もう東根あたりはあまりおいしくないほうに入っているって、地元の人が言いますから。どこまで本当かわかりませんが、ただ一応東根なんかはブランドですよ。でも、一番おいしいところは秋田の横手、湯沢ぐらいまで。

増田 だいぶ上がったね。

井上 上がっています。そのうち青森県まで来るんじゃないかと(笑)。

10. まとめ

小澤 地域開発が研究テーマ分野別に分類した五つ目でしたが、補遺資料にあるように、そのほかにも増田先生は研究領域が非常に広くて、比較的最近のものでは『経済再生へのIT戦略』でいわゆるIT問題。

増田 これは小沢君。

小澤 小沢和浩君といって、同じ経済学部の教員です。

それから二つ目に掲げていますが、「新しい戦争とアメリカ体制の衰退」。これは経済理論学会の機関誌である『経済理論』に掲載されたものですし、三つ目に「ニューエコノミーとバブル経済」、これも現代の直近の問題を取り扱ったものですし、四つ目の「グローバリゼーションに関する若干の考

察」。

増 田 これは清水嘉治さんの退官記念。

小 澤 このように非常に多面的な領域にわたって研究されていますが、この資料に掲げたものに関連して、増田先生から解説、コメントをお願いします。

増 田 へんなものをいっぱい書いてるね。全体で考えると、大上段に理論でバサッと切ったつもりになると、小さいところからほころびがいっぱい出てきて、そのほころびを繕うみたいにして書いているという感じなんですよね。でも、もともとすごく大理論が好きなんです。

だから、「これだ」というように言うと、小さいところでボロボロと。

山 本 だから、アバウトだと言われちゃう（笑）。

増 田 小さいところまで全部詰めると、ナタの理論はできないから難しいんだけど、その辺の調整が難しいので。

日本なんかに関してもそうなのですが、今何が問題なのかと大上段で構えて問題提起をするぐらいなら楽なのですが、今みたいに、その地域のこの問題をどうと言われると、それについて若干勉強したぐらいではなかなか問題が解けないみたいなどころがある。

だけど、私の大きいテーマは、たぶん労働と環境と地域なのかもしれないです。地域は、私が疎開児童だということもあるかもしれないけれども、栃木の真岡の農家での、小さい頃の記憶というのがどこか鮮明に残っているところがありまして、都会生活はあまり本来、人間としていい生活のスタイルにはならないと、どこかに思っているところがあるのかもしれないです。ただ、地域に行くと悲哀の話しか聞かなくてこないから、たしかにね。

総長になって結構あちこちに行くんですが、例えば法政の創立者の二人は、杵築藩という大分の国東半島の小さい大名の藩校の生徒なんですよね。なぜ、そんな人が法政大学をつくるような経過になったかというところ、文化水準と知識水準がすごく高い藩校なんです。

その南には、大分は野上夫妻の生まれた臼杵はあるし中津があるし、そ



小澤光利氏

のように考えたときに、江戸時代にそれだけすごい力をなぜ持ちえたかと考えると、地域経済がたぶん相対的にきちんとしていたんだよね。だけど、今は地域経済がないから、大学もそうなんだけれども、みんな東京に出てきちゃっているとかたちの偏りだから、結局は地域が地域になくなって、もう枯渇してしまっている。

そうすると、たぶん日本の活力みたいなものが出てこないような感じがする。だから、もう一回ちゃんと地域からつくるといえるときに、経済的にどういふかたちで自力更生みたいなかたちをつくるかということ、本当に真剣に考えなければいけないんだけど、それには旧藩みたいに完全権限委譲で、例えば3万石ぐらいで自立するという話をしたときには、立候補したらそこでいっさい税金から何からその中でやるということ、何かそういう機構をもっていくなシステムを税体系が何かでしていかない限りは無理かもしれない。ただ、やった以上はたぶん大変なんだよね。

だから、その辺は山本先生の今後の知識の供給にかなり期待するところが大きいのですが、地方からという話のときに、実態が言えないというのが実に情けないなと思っています。地方に行ってそういう話を聞けば聞くほど。

柿崎 今、再生産構造研究会で大月書店というところからですが、シリーズ本が合計7冊になりますか。それで増田先生が趣意書を書いて、何とか完成させたいと思っています。増田先生もこれまで書かれたことをいろいろ問題提起して、最初に詰めが甘いところがあると思いますが、この本で何とか。先生は第1巻目ですね。そこで総長というお忙しい職をやりながら、最終的に詰めをきちんとやっていただきたいと思います。

行政職もあるけれども、いろいろ理論的課題を残していることがあるの

で、詰めは忘れないようにやっていただきたい。みんな期待していますので。

きのうポスト冷戦研があって、死なないで頑張ってもらいたいと（笑）。理論家なんだから、最終的にはちゃんと理論の詰めだけはやって、それで辞めていただきたいと皆さん言っていました。言っておいてくれと言われてましたので。暉峻先生その他、健康に気をつけてと言っていましたので、それだけお伝えします。

小澤 それでは時間もきましたし、柿崎さんの発言で話にまとまりができたと思いますので、きょうの座談会はこれにて終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

【研究関連資料】 増田壽男先生による分類

A 現代資本主義分析

「独占と蓄積に関する若干の論点」（『経済評論』（1976，6月増刊号）

「現代帝国主義の分析視角」（高須賀義博編『独占資本主義論の展望』1978）

「戦後国独資の矛盾発現としてのスタグフレーション」（船橋尚道編『現代の経済構造と労使関係』1984）

「ポスト冷戦と『21世紀型危機』」（『経済志林』71巻4号2004）

B 労働運動研究者集団

「日本資本主義とスタグフレーション」（労働運動研究者集団編『スタグフレーション』日本評論社1977）

「外国人労働者の組織化」（『労働法律旬報』1394号1996）

C イギリス留学

「サッチャリズムと炭鉱ストライキ」（『経済科学通信』1988）

「イギリス資本主義の危機とサッチャリズム」（『新保守主義の経済社会政策』1989）

D 再生産構造研究会, ポスト冷戦研究会

『現代経済と経済学』有斐閣1997, 新版2007

『現代日本産業の構造と動態』新日本出版社2000

『長期不況と産業構造転換』大月書店2003

『日本産業の構造転換と企業』新日本出版社2005

E 地域開発

「循環型地域社会の形成をめざす企業間連携」(『経済志林』73巻1, 2号2005)

「エコタウン事業の理念と現実, 上, 下」(『経済志林』73巻3, 4号2006)

『なぜ巨大開発は破綻したか』日本経済評論社 2006

[補遺資料] 司会者による追加分

* 『経済再生へのIT戦略』法政大学出版局 2006

* 「新しい戦争とアメリカ体制の衰退」(『経済理論』経済理論学会 2004)

* 「ニューエコノミーとバブル経済」(『労働法律旬報』1558号2003)

* 「グローバル化に関する若干の考察」(神奈川大学『商経論叢』第36巻3号2001)

* 「レーニン帝国主義論の意義と限界」(『資本論体系』第10巻, 有斐閣 2001)

* 「経済成長と新エネルギー」(『学術の動向』日本学術会議 2001)

* 「市場メカニズム信仰批判」上・中・下 (『労働法律旬報』1476, 1478, 1479号, 2000)

* 「レギュレーション理論とSSA理論の『蓄積体制』・『危機』論」(『資本論体系』第9-2巻, 有斐閣 1998)

* 「レギュレーション理論をめぐる」(『土地制度史学』1994)

* 「日本の労使関係に関する一考察—コリア『逆転の思考』を手がかりにして」(『経済志林』60巻3・4号1993)

* 『危機における現代経済の諸相』八朔社 1992

「日本資本主義のしたたかさの構造と矛盾」(『賃金と社会保障』1982)

* 『新保守主義の経済社会政策』法政大学出版会 1989

- * 「現代帝国主義の分析視角」(『独占資本主義論の展望』東洋経済新報社 1978)
- * 「自動回復力の喪失について」『三田学会雑誌』第67巻1号1974)
「独占分析への一視角—バラン=スウィージー共著『独占資本』によせて」
(『経済志林』第40巻2号1972)
- * 「独占価格の運動に関する一考察」(『三田学会雑誌』第63巻4号1970)
- * 「コングロマリット企業の市場支配力—独占価格に関する一考察」(『三田学会雑誌』第62巻2号1969)